

国際高等研究所

年次報告書 **2024**年度
ANNUAL REPORT

International Institute for Advanced Studies



国際高等研究所

年次報告書 2024 年度 ANNUAL REPORT

CONTENTS

ごあいさつ	3
松本先生を偲ぶ	4
高等研の成り立ち	5
沿革	6
研究のあゆみ	7
研究活動	9
自主研究	
科学技術の動向とロボティクスの将来 ～ロボティクスと家庭の関係～	11
持続可能でレジリエントな社会実現に向けた 学際共創の方法の開発と実践研究	13
人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 ～関係性との関連を手がかりに～	15
公募研究	
グローバルな分配的正義を促進する 科学システムと科学者の役割に関する研究	17
交流活動	19
けいはんな「エジソンの会」	19
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト	21
IIAS塾ジュニアセミナー	23
学生の学生による学生のための教養講座	25
学術交流／きづミーティング（集合知ネットワーク構築プロジェクト）	26
トピックス	27
研究企画推進会議	28
財務・決算報告	29
組織	31
施設紹介	33

本アニュアルレポートに記載されている所属・役職は特記されているものを除き
2025年4月1日現在、もしくはイベント開催当時のものです。



知の創造拠点として 人類社会が理想とする未来の実現に 貢献します

国際高等研究所（高等研）は1984年の創設以来、「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」という基本理念を掲げ、関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）の中核研究所として活動を続けてまいりました。

高等研では設立当初より、研究領域、世代、組織、国籍などの垣根を越えて、多様な専門性を持つ研究者が集い、複雑かつ多岐に渡る現代社会の課題に果敢に挑む「Beyond Boundaries」という精神を育んでまいりました。地球規模の気候変動や環境問題、増大する地政学的リスク、そして生成AIや自動運転の進化をはじめとする目覚ましい最先端科学技術の進展など、予測困難な変化が押し寄せる現代においてこそ、異なる専門分野の知見を融合し、多角的な視点から問題の本質に迫る高等研の学際的なアプローチは、その重要性を一層高めていると確信しております。

本年、けいはんな学研都市では、大阪・関西万国博覧会に合わせて、「未来社会への貢献～次世代への解～」をテーマとしたけいはんな万博2025が開催されています。高等研も、この国際的な交流イベントに積極的に貢献するため、関連する国際シンポジウム等を企画し、研究成果の発信とあるべき未来社会に関する議論を深めてまいります。

これまでの高等研の活動によって培われた貴重な財産を基盤としつつ、変化の激しい新たな時代への適応力を磨き、他機関と積極的に連携しながら、更なる発展を目指してまいります。今後も知の創造拠点として、人類社会が理想とする未来の実現に貢献できるよう、より一層尽力してまいります。今後とも、皆様の格別のご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

公益財団法人
国際高等研究所

理事長 上田 輝久

株式会社島津製作所
代表取締役 会長

松本紘先生のご逝去を悼む

去る2025年6月15日、松本紘所長がご逝去されました。当財団の発展に多大なご尽力を賜りましたご生前のご功勞を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

松本先生は、2015年に当財団の副所長にご就任されました。特に、基幹プログラム「けいはんな未来懇談会」では座長を務められ、けいはんな学研都市が培ってきた独自の文化や伝統を深く掘り下げ、30年後の理想的な姿について考察を深められました。その成果は、2017年6月に開催されたシンポジウム「30年先のけいはんな未来都市はいかにあるべきか」において、活発な議論を導く原動力となりました。また、三者協定などを通じて、けいはんなに立地する機関や自治体との連携強化にも多大なご尽力をいただきました。

2018年からは所長にご就任されました。先生は常々、研究は人々の生活と密接に関わり、人間を強く意識すべきであると説かれ、持続可能な社会の実現に向けた学際的な取り組みを行い、次代を担う若者が希望を持てる未来社会の実現に向けた研究の重要性を強調されてきました。また、「けいはんな学研都市『大学・研究機関』共創会議」の座長や「けいはんな万博2025運営協議会」の共同代表としても、けいはんな地域のみならず関西全体を視野に入れたさらなる交流・連携に大きく貢献されました。

我々は松本先生のご遺志を引き継ぎ、より良い未来社会の実現に向けて、一層の努力をしまいる所存です。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2025年6月19日
理事長 上田 輝久



略歴

松本 紘（まつもと ひろし）

生年月日：1942(昭和17)年11月17日生

出身：奈良県

学位：京都大学工学博士（1973年）

専門：宇宙プラズマ物理学、宇宙電波科学、宇宙エネルギー工学

1974年 京都大学工学部助教授
1975年 NASAエームズ研究所客員研究員
1980年 スタンフォード大学客員研究員
1992年 京都大学超高層電波研究センター長
2002年 京都大学宙空電波科学研究センター長
2004年 京都大学生存圏研究所長（2005年10月まで）
2005年 京都大学理事・副学長
2008年 京都大学総長（2014年9月まで）
2015年 理化学研究所第10代理事長（2022年3月まで）
2018年 国際高等研究所第8代所長（2025年6月まで）
2022年 株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）取締役会長（2025年6月まで）

【受賞・顕彰】

1993年、1998年 NASA Group Achievement Award (GEOTAIL)
2006年 ロシア Federation of Cosmonautics ガガーリンMedal
2007年 紫綬褒章
2008年 国際電波科学連合 Booker Gold Medal
2015年 フランス政府レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ
2017年 名誉大英勲章OBE
2021年 瑞宝大綬章

などを受章

人類の未来と幸福のために、 何を研究すべきかを研究する

2024年8月に法人創設40周年を迎えた国際高等研究所

基本理念

国際高等研究所は、1982年の関西学術研究都市調査懇談会（通称「奥田懇*」）の提言に基づき、「世界の英知を集め、人類の未来の指針を示す」ことを目的として設立されました。初代理事長の奥田東氏が提唱した「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」という基本理念のもと、「課題探索型の基礎研究」を行い、新たな学問の創造・進展、そして学界への貢献を通じた世界文化の発展を目指しています。

※「奥田懇」

奥田 東 京都大学元総長を座長とする関西文化学術研究都市の構想を検討する有識者懇談会。1978年から1984年までの間に3次に亘り5回の提言を行った。



設立の経緯と創設40周年

国際高等研究所は、その基本理念に賛同する産業界、学界、官界の支援を受け、1984年8月に文部省の認可を得て財団法人として創設されました。けいはんな学研都市構想の具体化の中で、海外の高等研究所を参考に、同都市の中核的な学術研究機関として設立されました。京都府からの土地提供を受けて、1993年10月にけいはんな学研都市に開所し、2013年4月には公益財団法人へ移行しました。2023年10月にけいはんな学研都市での開所30周年、2024年8月には法人創設40周年を迎えました。



【設立時寄付企業等】

京都財界、関西経済連合会、経済団体連合会、加盟企業を中心に

- | | | |
|---------------|--------|------|
| ●「財団設立時の支援企業」 | 京都財界 | 23社 |
| ●「40億円募金」 | 全国主要企業 | 151社 |
| ●「冠基金」他、大口寄付 | | 10件 |

活動方針と基本的性格

国際高等研究所は、「国や研究分野を越えた優秀な研究者が集い、自由な雰囲気の中で交流し、討論すること」を運営方針とし、創造的な基礎研究を推進します。

創設以来一貫して、右記の4項目を基本的な性格として研究活動の重要な柱としています。

- 国際的な研究機関であること
- 先進的な分野・課題を選んで基礎的な研究を行うこと
- 研究課題と研究者が固定しないようにすること
- 産業界と協力すること

● 歴代所長・理事長 ● 事業履歴

1978

■ 関西学術研究都市調査懇談会発足（通称：奥田懇）



1984

■ 財団法人国際高等研究所設立許可（文部省）
（京都商工会議所5階）

1984.8~1994.3

■ 初代理事長 奥田 東
京都大学名誉教授、京都大学第17代総長

1993

■ けいはんな学研都市に本研究所開所



1994.4~1998.3

■ 第2代理事長 岡本 道雄
京都大学名誉教授、京都大学第19代総長

1998.4~2004.3

■ 第3代理事長 新宮 康男
関西経済連合会会長（第11代）

2004.4~2018.6

■ 第4代理事長 立石 義雄
オムロン株式会社名誉会長
京都商工会議所会頭（第16代）

2013

■ 公益財団法人へ移行（内閣府）

2013~2015

■ 国際高等研究所戦略会議（ISC）設置

2017

■ 経営基盤委員会の設置と答申



2018.6~2023.6

■ 第5代理事長 森 詳介
関西経済連合会相談役、関西経済連合会第14代会長

2023.6~ 現在

■ 第6代理事長 上田 輝久
株式会社島津製作所 代表取締役 会長

1990.4~1994.3

■ 初代所長 岡本 道雄
京都大学名誉教授、京都大学第19代総長

1994.4~1996.3

■ 第2代所長 小田 稔
理化学研究所第6代理事長

1996.10~2001.3

■ 第3代所長 沢田 敏男
京都大学名誉教授、京都大学第20代総長

2001.4~2009.3

■ 第4代所長 金森 順次郎
大阪大学名誉教授、大阪大学第13代総長

2009.4~2013.3

■ 第5代所長 尾池 和夫
京都大学名誉教授、京都大学第24代総長

2013.5~2015.3

■ 第6代所長 志村 令郎
京都大学名誉教授、国際高等研究所前副所長
自然科学研究機構初代機構長

2015.4~2018.3

■ 第7代所長 長尾 真
京都大学名誉教授、京都大学第23代総長

2018.4~2025.6

■ 第8代所長 松本 紘
理化学研究所第10代理事長
国際高等研究所前副所長
京都大学名誉教授
京都大学第25代総長

※所属及び役職については就任当時のものです。

● 研究テーマ ● 事業履歴

財団法人国際高等研究所設立許可（文部省）（1984）

奥田 東 初代理事長就任（1984）

けいはんな学研都市に本研究所周所（1993）

岡本 道雄 第2代理事長就任（1994）

1995

- 社会情報学（吉田民人）
- 情報論的転回（吉田民人）
- わざ学（山口 修）

1996

- 人類の自己家畜化現象と現代文明（尾本恵市）
- 生命体の多様性（岩槻邦男）

新宮 康男 第3代理事長就任（1998）

1998

- 政府統治（government governance）の研究（本間正明）
- 環境と食料生産の調和に関する研究（渡部忠世）
- 生物研究と生命（中村桂子）
- ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理問題とそれへの対応（武部 啓）
- 情報市場における近未来の法モデル（北川善太郎）

2000

- 高度情報化社会の未来学（坂井利之）
- 種族維持と個体維持のあつれきと提携（岡田益吉）
- 多様性の起源と維持のメカニズム（吉田善章）

2001

- 公共部門における人材の配分と育成（猪木武徳）
- 東西の恋愛文化（青木生子）
- 災害観の文明論的考察（小堀鐸二）
- 思考の脳内メカニズムに関する総合的検討（波多野諄余夫）
- 物質科学とシステムデザイン（金森順次郎）

2003

- 開発途上国と日本人長期政策アドバイザー（橋本日出男）
- 分化全能性（原田 宏）
- 共同研究の法モデル（北川善太郎）

立石 義雄 第4代理事長就任（2004）

2005

- 進歩主義の後継ぎはなにか（廣田榮治）
- 産学連携の知的財産法モデル（北川善太郎）
- コア・エグゼクティブと幹部公務員制度の研究（村松岐夫）
- 多元的世界観の共存とその条件（石川文康）
- 電子系の新しい機能（新庄輝也）
- 学術研究機関における学術情報システムのモデル構築（北川善太郎）

2008

- 絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識（近藤寿人）
- 近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造（手島勲矢）
- 数量的アプローチによる日本経済の比較史的研究（宮本又郎）
- ナノ物質量子相の科学（金森順次郎）

関西学術研究都市調査懇談会（奥田恵） 発足（1978）

1989

- 世界の高等研究所交流会議
- 国際公開フォーラム
- 「人類の未来に関する創造的研究をめざして」（東京・大阪）

岡本 道雄 初代所長就任（1990）

1991

- 理論生命科学（岡田節人）

1993

- 安全科学（村上陽一郎）

小田 稔 第2代所長就任（1994）

1994

- 比較幸福学（中川久定）
- 複雑系の秩序と構造（長谷川晃）

沢田 敏男 第3代所長就任（1996）

1997

- 科学の文化的基底（伊東俊太郎）
- 言語の脳科学（乾 敏郎）

1999

- 器官形成に関わるゲノム情報の解読（松原謙一）
- 物質研究における多角的協力の構築（金森順次郎）
- 臨床哲学の可能性（野家啓一）
- 「一つの世界」の成立とその条件（中川久定）

金森 順次郎 第4代所長就任（2001）

2002

- 国際比較からみた日本社会の自己決定と合意形成（田中成明）
- スキルの科学（岩田一明）
- センサー論（鷺田清一）
- 量子情報の数理（大矢雅則）
- 21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題（木下富雄）

2004

- 学習の生物学（星元 紀）
- 芸術と社会（佐々木正子）
- 隙間－自然・人間・社会の現象学－（鳥海光弘）
- ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義（津田一郎）

2006

- 計算機マテリアルデザインコピーマートの構築（中西 寛）
- 19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究（吉田 忠）
- スキルと組織（榎木哲夫）
- 認識と運動における主体性の数理脳科学（沢田康次）
- グローバリゼーションと市民社会（仁科和彦）
- 生命科学の発展に対応した新しい社会規範の模索（位田隆一）
- 文化財保全技術（志水隆一）

2007

- 高度計測技術の発展と埋没（本河光博）
- 細胞履歴に基づく植物の形態形成（鎌田 博）
- 次世代情報サーチに関する総合的研究（田中克己）
- 女性研究者と科学技術の未来（伊藤厚子）
- すきまの組織化（鳥海光弘）
- スンマとシステム－知のあり方－（亀本 洋）
- 生物進化の持続性と転移（津田一郎）

2009

■宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略（海部宣男）

■受容から創造性へ

ー近現代日本文学におけるスタンダードの場合ー（ジュリー ブロック）

■諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理学への展開（高橋陽一郎）

■天地人（尾池和夫）

■21世紀における文化としての設計科学と生産科学（岩田一明）

■法と倫理のコラボレーションー活気ある社会の規範形成ー（服部高宏）

■メタマテリアルの開発と応用（石原照也）

2011

■『ケア』から見た社会保障の新たな展望（西村健一郎）

■心の起源（松沢哲郎）

2012

■高等研カンファレンス・レクチャー 2012「Evolutionary Origins of Humanmind」開催

2013

■クロマチン・デコーディング（石川冬木）

■分子基盤に基づく生体機能への揺らぎとダイナミックネットワークの解明（寺嶋正秀）

2014

■ネットワークの科学（郡宏・増田直紀）

■精神発達障害から考察するdecisionmakingの分子的基盤（辻 省次）

■生命活動を生体高分子への修飾から俯瞰する（岩井一宏）

■設計哲学ー俯瞰的価値理解に基づく、

人工財の創出と活用による持続可能社会を目指してー（梅田 靖）

■総合コミュニケーション学（時田恵一郎）

2016~

■ けいはんな“エジソンの会”発足

■ 理化学研究所及び京都府と基本協定を締結

■ 奈良先端科学技術大学院大学及び理化学研究所との相互協力に関する包括協定を締結

2017

■「日本文化創出を考える」研究会（西本清一）

森 詳介 第5代理事長就任（2018）

高等研将来構想検討会設置（2019）

■ IIAS「哲学と先端科学」の対話シリーズ

2022~

■ <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト開始

上田 輝久 第6代理事長就任（2023~）

■ 学生の学生による学生のための教養講座開始

■ 2024年度に実施の研究活動

■ 終了した研究テーマ

尾池 和夫 第5代所長就任（2009）

2010

■アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築（藤田治彦）

■意識は分子生物学でどこまで解明できるか？（坂野 仁）

■交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のためにー（松岡 博）

■ジェンダーからみた家族の将来（姫岡とし子）

■宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究ー禅をケーススタディとしてー（天野文雄）

■単分子エレクトロニクスの現状認識と近未来実現へ向けての中核体制構築（夢田博一）

2011

■ 高等研カンファレンス・レクチャー 2011「Frontiers in Neuroscience:From Brain to Mind」開催

2012

■老いを考える（松林公蔵）

■ゲノム工学とイメージングサイエンスに基づく生命システム研究の新展開（川上浩一）

■東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」（天野文雄）

公益財団法人へ移行（内閣府）

志村 令郎 第6代所長就任（2013）

2013~

■ 国際高等研究所戦略会議（ISC）設置

■ けいはんな哲学カフェ“ゲーテの会”発足

2014

■ 創設30周年記念フォーラム開催（大阪・仙台・東京・けいはんな）

■ 高等研カンファレンス・レクチャー 2014「Chromatin Decoding」開催

長尾 真 第7代所長就任（2015）

2015~

■ IIAS塾ジュニアセミナー開始

2015

■人工知能に関する問題発掘型対話基盤と新たな価値観の創出（江間有沙）

■領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて（児玉 聡）

■21世紀地球社会における科学技術のあり方（有本建男）

■人類生存の持続可能性ー2100年価値軸の創造ー（佐和隆光）

■多様性世界の平和的共生の方策（位田隆一）

■「けいはんな未来」懇談会（松本 紘）

2017

■ 国際高等研究所シンポジウム開催（大阪・東京）

■ 基幹プログラム（2015-2017）報告書を発刊

経営基盤委員会の設置と答申

松本 紘 第8代所長就任（2018）

2018

■SDGs時代における科学技術のあり方ーブダベスト宣言から20年ー（有本建男）

■第4次産業革命への適応

ー社会経済システムの再編成ー（佐和隆光）

■教育を基軸とした住民参加型地域振興（高見 茂）

ーけいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成

ーけいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み

ーヘルスリテラシー向上を通してー

2019~

■きづミーティング（集合知ネットワーク構築プロジェクト）（駒井章治）

2020

■ 基幹プログラム（2018-2020）報告書を発刊

2021

■変化の時代に“何を研究するかを研究する”方法の予備的探索

ー学問知識のメタ分析とデザインー（有本建男）

■なぜ今「脱炭素」のうねりなのか（佐和隆光）

■けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み

ーヘルスリテラシー向上を通してー（第2期）（高見 茂）

2023~

■科学技術の動向とロボティクスの将来ーロボティクスと家庭の関係ー（小寺秀俊）

■持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と

実践研究/全国キャラバン3QUESTIONS（有本建男/宮野公樹）

■人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究ー関係性との関連を手がかりにー

（高見 茂）

■グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

（新福洋子）

2024

■ 創設40周年記念・けいはんな万博2025プレイベント国際シンポジウム開催

国や組織、分野を越え、 人類社会が直面する課題を考える

国際高等研究所は1984年の創設以来、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」ことを基本理念とし、学問分野の境界を越え研究者が結集して、人類が直面する諸課題に関する学際的研究を進めています。

高等研は、京都、大阪、奈良に渡るけいはんな学研都市地域にあり、日本が培ってきた歴史、文化、芸術、技能、風土と先端研究が交差する環境に立地します。人間や人々の生活を意識しながら、課題の発見から解決までを、学術研究に基づいて総合的に取り組むことができる位置にあります。

また高等研は、学問領域や専門分野のみならず、世代、

組織、国籍を越え、研究者が横断的に集い研究を進める方針（Beyond Boundaries）を、創設以来今日まで継承しています。

このような特徴を生かした研究を行い地域社会に貢献するとともに、学術研究や社会のあり方を考え、次世代を担う若者が希望を持てる未来社会の実現につながる研究活動を進めています。

■自主研究

自主研究は、高等研の中核を成す研究です。研究代表者は高等研が主体的に人選し、高等研の一貫した特徴であるBeyond Boundariesの研究基盤を有する研究を実施していきます。2024年度は、以下の三つの自主研究を推進しました。

科学技術の動向とロボティクスの将来 ～ ロボティクスと家庭の関係 ～

研究代表者

小寺 秀俊 国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授

持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究

研究代表者

有本 建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授
国際学会会議（ISC）フェロー

研究副代表・実行責任者

宮野 公樹 国際高等研究所主任研究員、京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 ～ 関係性との関連を手がかりに ～

研究代表者

高見 茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、京都光華女子大学学長、京都大学名誉教授



(2023年6月撮影)

■公募研究

公募研究は、研究方針と課題観を同じくする外部研究者が構想する研究です。対象とする研究は、高等研の「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」という基本理念に照らして相応しく、将来新しい学術を切り拓く可能性を秘めた、根源的な問いに取り組む学際的な研究としています。2024年度は、2023年度の研究公募により採択された以下の研究を実施しています。

グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

研究代表者

新福 洋子 広島大学大学院医系科学研究科教授

研究代表者

小寺 秀俊

国際高等研究所副所長
京都大学名誉教授・特任教授
大阪大学特任教授



科学技術の動向と ロボティクスの将来

～ロボティクスと家庭の関係～

けいはんな学研都市がロボットおよびロボティクスの研究開発と事業化の拠点であることから、ロボットとロボティクスさらには、Human Augmentation（人間と技術の一体化による人間の能力の拡張）における研究開発現状を調査するとともに、今後の方向性を議論する。

ロボットおよびロボティクスに関しては、従来の研究、現在のロボティクス研究等の状況や今後の方向性をヒヤリングするとともに、人とロボットの関係やHuman Augmentation技術の今後の方向性を調査し、ロボットが人に関わる際の感性や倫理および技術に関する議論を行い、その議論の内容をまとめる。

尚、2025年度にEXPO2025での展示等により市民の感想などを得て、今後の方向を検討する。

参加研究者

氏 名	所属・役職
小寺 秀俊 (研究代表者)	国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授・特任教授 大阪大学特任教授
美濃 導彦 (顧問)	京都大学名誉教授、理化学研究所 情報統合本部本部長 ガーディアンロボットプロジェクト プロジェクトディレクター
中村 泰 (主査)	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト 動作学習研究チームチームディレクター
斉藤 康己	京都情報大学院大学教授、京都大学名誉教授 理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト業務嘱託
古川 淳一郎	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト 人間機械協調研究チーム研究員
港 隆史	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト インタラクティブロボット研究チームチームディレクター

研究目的と方法

- 現在ロボットの研究は大きく分けて、3つに大別できる。
- (ア) 製造業における作業ロボット
 - (イ) 災害時等に人が入ることが困難な環境において作業するロボット
 - (ウ) 人を支援するための支援ロボット

ロボットの研究開発の歴史は古く、機械工学における機構と制御に関する研究から、多くのロボットシステムが工場等の作業現場で利用されるようになった。21世紀に入り、事前にプログラミングされた機能を発揮するだけではなく、搭載されたセンサーからの情報をもとに、動作を決定する知能化が進んできた。

現在、人とサイバー空間の間にはPC、Tabletさらにはsmart phoneという情報端末が存在する。現在のsmart phoneは、すでに搭載されたセンサーや接続されているセンサー機器からの計測情報をもとに利用者を補助する機能を実現していて、21世紀に始まったIoTの中核端末として機能している。また、AIおよび生成AIはネットワーク上に蓄積された多くの情報を元に推論し、新しい情報を生み出す能力を持っているように見える。

現在のロボット研究では、これらのAI、IoTを旧来の機械工学・制御工学と組み合わせ、多くの新たな役割を果たすことが期待されている。現在は、smart phoneやsmart watch等が人とサイバー空間の間のコミュニケーションの主な媒体であるが、近い将来、ロボットがその役割を果たす可能性がある。その場合、ロボットは企業等における作業現場で活躍するだけでなく、人の生活の場である家庭に入り、人と大きな関わりが生じることになると考えられる。

本研究プロジェクトは、家庭というサイバーフィジカル空間での存在感が大きくなりつつあるロボットと人の関係について、i) これまでの研究の調査、ii) 現在推進されているロボット研究の現状と課題の抽出、iii) 人とロボットの関係における人の感性や倫理に関して研究者へのヒヤリングや討論などを行い、今後の研究の課題をまとめることを目的とする。尚、2025年度に大阪で開催の万国博覧会で理化学研究所から展示を行い、そのアンケート結果も参照しながら最終報告書をまとめる。

2024年度の具体的取組と実績

①第二回 自主研究ミニ・シンポジウムシリーズの開催 テーマ：「教育×アートにおけるロボットの共存」 ～ロボットのマルチモダリティがもたらす次世代の学びと表現～

ロボットと共に生きる未来に向け、家庭や教育、そしてアートの現場における新たな共存の可能性を探る場を設けた。SHOSAプロジェクト(<http://www.geminoid.jp/projects/shosa/>)のアーティストや教育者を招き、「所作」が引き出す感性と、ヒューマンインタラクションにおいて人間とロボットのマルチモダリティが融合することで、学びと創造性がどのように豊かなになるか、参加者とともに議論した。

「所作」とは、日本の文化において培われた、身体と心を結びつけ、相手と自分を調和させるための暗黙のコミュニケーションであり、SHOSAプロジェクトでは、この「所作」を現代において進化させ(「SHOSA」)、相手や環境との関わりの中で、豊かな心の表現を生み出すことを目指している。「SHOSA」は、人間だけでなく、ロボットなどあらゆる「いのち」との関わりの中で、多様で豊かな心を表現する。SHOSAプロジェクトが製作したインストール(体験空間)では、参加者がアンドロイドア

バターと言葉なしの身体的なインタラクションを通して、相手の心を想像し、相手と調和するコミュニケーションを体験した。

当日は、SHOSAプロジェクトから5名の専門家を招き、これまでのインストール体験者の評価を踏まえて、人間とロボットの関係、特に教育や家庭環境におけるロボットの役割について議論した。

開催内容

日時 2024年11月12日(火) 15:00～17:00

場所 株式会社国際電気通信基礎技術研究所2階 旧図書室

登壇者(所属) 【専門分野】(※五十音順、敬称略)

石黒 浩(大阪大学教授/株式会社国際電気通信基礎技術研究所客員所長)【ロボット工学】

菊地 あかね(株式会社KiQ)【アート】

船山 智(株式会社国際電気通信基礎技術研究所)

【ロボット工学】

マライア シャーミ(株式会社 KiQ)【教育】

宮内 俊樹(株式会社KiQ)【アート】

参加者 61名(内現地参加19名)

家庭というサイバーフィジカル空間での存在感が大きくなりつつあるロボットと人の関係は、これまでの道具とユーザという関係から、今後変わっていくと考えられる。そこで、シンポジウムでは、ロボットと共に生きる未来に向け、家庭や教育、そしてアートの現場における新たな共存の可能性を探ることを目的として、10代の子どもたちとのセッションから得られたデータをもとに、家庭や教育現場でのロボット活用、「所作」を取り入れた人とロボットのインタラクションがもたらす影響を考察した。また、「所作」が引き出す感性と、ヒューマンインタラクションにおいて人間とロボットのマルチモダリティが融合することで、学びと創造性がどのように豊かになるか、SHOSA プロジェクトのアーティストや教育者とともに議論した。教育現場での「心の触れ合い」を再現するデモンストレーションを通じ、ロボットと人とのコミュニケーションの新しい表現と学びにおける可能性を現地参加者に体験してもらい、その後、石黒教授を交えてパネルディスカッションを行った。

パネルディスカッションの内容

菊地氏の司会で、5名の登壇者のそれぞれの専門的立場の意見を聞きながら、人間とロボットの関係、教育や家庭環境におけるロボットの役割について、参加者も交えて議論した。

ロボット工学の観点から、SHOSA インストールにおけるロボットの効果について、石黒氏は、細かな人間らしい動作、例えば首の動かし方や手の動かし方が、ロボットの印象を大きく変え、心を感じさせる非常に重要な要素になっていると説明した。船山氏は、ロボットとの対話だと純粋な気持ちでコミュニケーションに向か



うことができたり、SHOSAインストールを体験して、体験者が自分の中の優しい気持ちが増すという効果があったことを述べた。宮内氏も、人を優しくするインターフェースの実用性が近づいていることを述べた。

教育現場でのロボットの活用について、マライア氏は子供たちのデジタル環境への早期露出が、相手の気持ちの理解、相手への気持ちの伝達の能力への影響を指摘した。参加者からも、大学生でも日本人学生は同じ世代としか繋がっていない感があるという指摘があった。それらを踏まえて、人間との心のつながりを支援するツールとしてのロボットの可能性が示された。

家庭におけるロボットの役割についても、孤独な高齢者のためのコンパニオンとしての可能性や、家族のコミュニケーションを補助する役割が議論された。また、子供の成長過程におけるロボットの影響や、家族の愚痴を聞くなど、感情的なサポートを提供する可能性についても言及された。

最後に、石黒氏は、家庭用ロボットの開発と普及を促進し、「一家に1台」の時代を目指す必要性を提案した。

②第三回 科学技術の動向とロボティクスの将来に関する会議の開催

東京理科大学の松本吉央教授を研究会に招き、介護ロボットに関係するこれまでの研究の歴史および今後の介護ロボット開発における課題に関して、話題提供いただいた。また、介護ロボットおよび支援ロボットなどとともに、補助装具に関する機能とその効果および今後必要な研究開発や機能などに関しても議論を行った。

その中で、心身の状態変化に応じた切り替え(時間的)、環境に応じた切り替え(空間的)の組み合わせで必要な機能が変化し、それに合わせた機器の提供が必要であると指摘された。また、IoT的なフィードバックが必要であることが述べられた。

社会実装に向けた課題として、利用者の数や活用可能なシーンなどを考慮した市場の大きさなどについても議論が行われた。支援ロボットの効果や利便性の評価において、要支援者が「できる機能」と「している機能」を区別がなされているなど、技術開発の側面だけでなく、社会実装での側面の考え方に關しても知識を深めることができた。

日時 2025年1月7日(火)11:00～13:00

場所 株式会社国際電気通信基礎技術研究所

話題提供者 松本 吉央(東京理科大学先進工学部機能デザイン工学科教授(産総研))

湯口 彰重(東京理科大学助教、元理研ロボティクス:TV会議で参加)

出席者 中村 泰(主査)、港 隆史、古川 淳一郎、小寺 秀俊



今後の課題・期待される効果

2024年度においては、上記の通りSHOSAプロジェクトに参加者に体験してもらうとともに、人とロボットがつながる社会の可能性を紹介し、参加者とともに議論した。また、高齢化する社会において、必要となる介護や補助装具などのこれまでの研究開発の歴史と今後に関する研究会を開催し、将来の方向性の検討を行った。

2025年度には大阪・関西万博において、理化学研究所は対話ロボットおよび支援ロボットの体験展示を行う。この体験を行った一般の人の感想などのアンケート結果も参考にしながら、今後のロボットの家庭内への展開の可能性と課題を議論し、本プロジェクトのまとめを行う。



研究代表者

有本 建男

国際高等研究所
チーフリサーチフェロー
科学技術振興機構参与
政策研究大学院大学客員教授
国際学術会議（ISC）フェロー

研究副代表・実行責任者

宮野 公樹

国際高等研究所主任研究員
京都大学学際融合教育研究
推進センター准教授

持続可能で レジリエントな 社会実現に向けた 学際共創の方法の 開発と実践研究

人類は生存の危機、学問・科学技術の危機に直面している。特に日本の学問、世代、組織などの分断状況は厳しい。高等研発足の理念「何を研究するかを研究する」に立ち戻り、研究開発の間、社会の間の探求、問の立て方、解決の方法について、多様なステークホルダーが、分野、組織、ジェンダー、世代、国の境界を越えて、ボトムアップで自由に議論し、新しい学問・科学・技術・社会の方向を探索する場を共創的に醸成する。さまざまな壁を越えて、内外の個人・集団を結ぶネットワークを形成・維持・拡大していく。

参加研究者

氏 名	所属・役職
有本 建男 (研究代表者)	国際高等研究所チーフリサーチフェロー 科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授 国際学術会議（ISC）フェロー
宮野 公樹 (研究副代表・ 実行責任者)	国際高等研究所主任研究員 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
上野 ふき	名古屋大学大学院情報学研究科社会情報学専攻情報 哲学講座研究員、大阪大学基礎工学研究科システム 創成専攻知能ロボット学研究室招へい研究員
呉 玲奈	株式会社ユニオン・エー 編集者
中山 俊秀	東京外国語大学副学長、同大アジア・アフリカ言語文化 研究所教授、同大学際研究共創センター長
矢代 真也	SYYS LLC 代表、編集者
渡辺 彩加	国際高等研究所特任研究員 京都大学学際融合教育研究推進センター技術補佐員 同大学東南アジア地域研究研究所連携研究員

趣旨

(目的) 境界を越えた議論と探求の場の醸成

人類は生存の危機、学問・科学技術の危機に直面している。特に日本の学問、世代、組織などの分断状況は厳しい。高等研発足の理念「何を研究するかを研究する」に立ち戻り、研究開発の間、社会の間の探求、問の立て方、解決の方法について、多様なステークホルダーが、分野、組織、ジェンダー、世代、国の境界を越えて、ボトムアップで自由に議論し、新しい学問・科学・技術・社会の方向を探索する場を共創的に醸成する。さまざまな壁を越えて、内外の個人・集団を結ぶネットワークを形成・維持・拡大していく。

所属役職や研究分野にとらわれずに自由な思考と表現が可能な空間は、現在の日本の学術界において貴重である。本研究は時間をかけて我が国の学術界の基盤と文化の醸成を目指している。また、これまでの高等研の活動は多くがテーマ

先行型であり、理念に照らし何らかのテーマ設定を行ったうえで、実施されてきた。このような高等研の歴史のなかで、本研究はテーマ先行型ではなく、テーマ探索型という特徴を持っている。こうした活動の実施により、将来を見据えた重要な研究テーマの発掘とそうした研究を実施できる人材の支援を行う。

(方法) 対話集会「全国キャラバン3QUESTIONS」を全国9地区で実施

全国9地区において、「全国キャラバン3QUESTIONS」と題する100人規模のポスター発表対話集会を開催する。ここでは、研究者は「何を知りたいか」「そのために何を（しようとして）いるか」「皆への問いかけ」という3点について自由に表現する。それらを見ながら、4から5日間にわたり、研究者や市民、さまざまな業界の人々が集まり議論を行う。その記録を小冊子『となりの研究者』として発行する。単に多様な学術分野が集まった発表に留まらず、本音で対話ができる仕組みを工夫し、自身の研究を問い直す場となることを目指す。

2023年3月の中国地区開催を皮切りに、2024年度は、北海道、東海、北信越、四国の4地区で「全国キャラバン3QUESTIONS」を実施した。2025年度は、九州・沖縄、東北、関東、関西の4地区での開催を予定しており、これをもって全国9地区での実施を終える。その後は、各地区のポスターから優れたものを選出し、関東にて大規模な全国学術ポスター発表&交流会を計画している。2年間、9地区での開催実績を踏まえ、これらに共通する課題とそれぞれの特徴を俯瞰的に分析し、今後学際共創プラットフォームを効果的・持続的に拡大する方法と体制について実践的提言をまとめる。

事業内容

(全国キャラバン3QUESTIONSの具体的な企画内容)

・開催地区の研究者からなる100人規模の研究ポスター発

表大会。「匿名」での研究発表とすることで先入観を取り除いて本音の意見交換を実施。研究ポスター掲示者は、地区の大学、研究機関に所属する教員、研究者。

- ・どの分野でも発表可能。多分野が集まる場合、ややもすると雑多で浅い意見交換になりがちなところを、研究ポスターの発表形式を統一すること等の工夫で本質的対話を促す。
- ・研究ポスターに「こういう専門の方と話したい!」というコラボ用ハッシュタグを記載し、新たな共同研究の創出をねらう(匿名性でありながらも、参画研究者番号、来場者にも参加登録番号を付与し、希望する場合は後日コンタクトをとれるシステムを整備)。
- ・期間中に、複数回のグループセッションを実施することで、リアルにも出会いを創出。グループセッションは協賛企業からテーマを募集し、事務局がテーマにあわせたキーワードごとに参画研究者のグループを作って公開ディスカッション。
- ・参画研究者が業績としてリストアップできるよう、企画後に各研究テーマとコメントを記載した冊子を作成。この冊子においては、名前、写真、プロフィールも記載することで、後日ネットワークの形成に活用されることを狙う。

(2024年度の取り組み実績)

2024年度は、「全国キャラバン3QUESTIONS 一北海道地区一」から順に、東海地区、北信越地区、四国地区の4地区で実施。

1) 北海道地区

<https://www.iias-3questions.info/hokkaido>

日時：2024年10月6日～10月10日

場所：北海道大学フード&メディカルイノベーション国際拠点(FMI)

研究テーマ揭示：78件

研究者参加組織：北海道大学、旭川医科大ほか、北海道地区20の学術組織

グループセッションのテーマ：

- ・この社会はどのような「価値」がどう「循環」していくのか？
- ・あなたの研究者としての野望・夢は？50年後どんな社会にしたいですか？
- ・北海道と温暖化、起こり得る変化について話しておきませんか？
- ・人間の創造性を高める、もしくは引き出すためには？
- ・「スタジアム・アリーナ改革」が地域へもたらす恩恵とは？

2) 東海地区

<https://www.iias-3questions.info/toukai>

日時：2024年11月10日～11月14日

場所：名古屋国際センター

研究テーマ揭示：95件

研究者参加組織：名古屋大学、岐阜大学、三重大学ほか、東海地区22の学術組織

グループセッションのテーマ：

- ・ジレンマという本質：例えば、環境配慮とコスト高
- ・「いい研究」とは何か—自己、社会、歴史、地球—
- ・SDGsを外から考える—“人間”の営みとして—
- ・なぜ我々は自らのモチベーションに振り回されるのか？
- ・東海地区の課題もろもろ多視点トーク

3) 北信越地区

<https://www.iias-3questions.info/hokushinetsu>

日時：2024年12月7日～12月10日

場所：富山国際会議場

研究テーマ揭示：79件

研究者参加組織：富山大学、金沢大学、新潟大学ほか、北信越地区17の学術組織

グループセッションのテーマ：

- ・なぜ我々は自らのモチベーションに振り回されるのか？
- ・あなたの研究者としての野望・夢は？
- ・次のさらに次の時代をどんな社会にしたいですか？
- ・「いい研究」とは何か—自己、社会、歴史、地球—

4) 四国地区

<https://www.iias-3questions.info/shikoku>

日時：2024年12月18日～12月22日

場所：香川県民ホール

研究テーマ揭示：57件

研究者参加組織：香川大学、愛媛大学、徳島大学、高知大学ほか、四国地区15の学術組織

グループセッションのテーマ：

- ・なぜ我々は自らのモチベーションに振り回されるのか？
- ・この社会はどのような「価値」がどう「循環」していくのか？
- ・「いい研究」とは何か—自己、社会、歴史、地球—
- ・四国地区の課題、多視点トーク

いずれも、開催期間中、延べ150～200人程度の来場者(研究者30%、企業30%、学生・院生20%他、行政、小中高生、パパ・ママ、アーティスト等)、ならびに、各地区開催後、平均20件前後のマッチングあり(研究者⇄研究者、研究者⇄企業、研究者⇄一般の方、含む)。

(2025年度の計画)

東北・九州沖縄・関西・関東の4地区での実施を計画。実施費用として、協賛企業からの資金に加え(10社以上)、クラウドファンディングも行っている。





研究代表者
高見 茂
国際高等研究所
チーフリサーチフェロー
京都光華女子大学学長
京都大学名誉教授

人を健康と幸せに導く 「意識」に関する研究

～関係性との関連を手がかりに～

今日、人類の生存に関わる諸問題が懸念される中、世界では持続可能な社会の実現に向けて文化学術研究の一層の推進が求められているところである。本研究所の所在する「けいはんな学研都市」は、建設当初よりこうした課題に対し、地球規模での環境に関する研究や自然科学と人文・社会科学との融合による文化学術研究、さらには時代を先取りした多様な試みなどについて積極的に取り組んできた。その結果、1994年の都市びらき以降多くの研究機関や企業が集積し、関西圏では類を見ない科学都市として成長を続けている。

本研究のねらいは、「先端幸福創造都市けいはんな」実現の手立ての一つとして、人を健康と幸せに導く「意識」を明らかにし、けいはんな地区住民を中心とした市民レベルのウェルビーングの向上を図る手がかりを見出すことにある。

参加研究者

氏 名	所属・役職
高見 茂 (研究代表者)	国際高等研究所チーフリサーチフェロー 京都光華大学学長、京都大学名誉教授
秋山 知宏	国際高等研究所特任研究員 総合地球環境学研究所上廣環境日本学センター特任准教授
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康解析学講座教授
木下 翔太郎	慶應義塾大学医学部 ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座特任助教
高松 邦彦	東京科学大学戦略本部マネジメント教授
高見 佐知	未来教育研究所研究開発局長

研究目的と方法

本研究は、2015年度から2017年度にかけて国際高等研究所で実施した『「けいはんな未来」懇談会』および『「けいはんな未来」専門検討部会』で提案された「先端幸福創造都市」の実現に向け、また具体的にけいはんな学研都市地域の振興を図る方策を調査検討することを目的として立ち上げられたものである。さらにそれは、本研究に先行して実施された「けいはんな地域のヘルスリテラシーの向上策の研究」の継続研究としても位置づけられる。同研究を通じて得られた知見として、健康にはi)最先端の科学技術による治療や予防、ii)情報通信技術の利活用、iii)医療制度や医療現場の改善、iv)医学の発達、v)人々の助け合いの社会システムへの組み入れ、vi)個人の意識改革や行動変容、vii)以上の要素が好循環することが必要である、ということであった。そして好循環を生み出す土台の上に、地域住民、地域社会がヘルスリテラシーを備えることが重要であると結論付けられた。

こうした研究成果は、人生100年時代を迎え健康で幸せに長生きするためにウェルビーングに対する人々の関心が高まっている事とも符合する。なぜならヘルスリテラシーの向上は、人々のウェルビーング達成の有効な手立ての一つであると考えられるからである。そこで本研究では、健康と幸せの実現のため

に必要な要素を見出すことを究極の目的とする。そして先行研究の成果から、健康や幸せを実現している人々に共通する要素として、「関係性」の存在(良好な人間関係、何らかのつながりの感覚＝「意識」の在り方)が重要であるとの知見が得られている。本研究では、健康と幸せを実現する「意識」をテーマとして取り上げた。特に「奇跡的事例」に着目し、「困難な状態から著しく健康を回復した」事例群において、共通して見られる意識の傾向や要素の抽出を試みた。

2024年度の具体的取組と実績

(1)海外文献の収集と分析

2024年度は2023年度に引き続き、海外文献の収集および読み込みならびに内容の分析を試みた。秋山研究員によって、コクランレビューを用いた文献検索とWeb of ScienceやPubMedなどのデータベースを用いた文献検索の2段階で作業を進められたが、キーワード、フレーズの選定に苦労した様である。スーパーバイザーの川上教授からの助言もあり、and/or条件を設定したキーワードを引くなど適切なアルゴリズムを明確にする必要があり、キーワード選択に至る合理的な思考と選択の必要性を確認した。その上で本研究のテーマである「意識」、特に「健康意識」の英語表現についても検討した。health awareness, health literacyなどが候補に上がったが、コクランレビューにおいてはhealth consciousnessが最も多くヒットした(60件)。また「劇的寛解」の英語表現についてもremissionでは範囲が狭く、「health outcomeの向上」の方がより適切であるとの意見も斟酌し文献検索を進めることとした。研究会で寄せられた意見を基に文献の読み込みを推進したがやはり難航した。そのためliterature__review__ver1.0.xlsxのA列にCochraneとある文献すべてをダウンロードしてスクリーニングする作業計画も立てた。

さらに木下研究員から、関連文献の分析を進めた結果、Klement,R.Jは2024年の文献でTurner,K.A.の2010年の文献を引用し、身体に悪影響を及ぼすとされた思考や感情の種類には、i)恐怖/不安、ii)怒り/憤り、iii)悲嘆/悲しみ、iv)憂鬱/生きる意欲の欠如が、また健康と癒しを因果的にサポートする思考や感情は、穏やかさ/リラックス、許し、幸福/愛/喜び、生きる強

い意志/生きる目的であったとの指摘があった。

またFrenle et al.の2015年の論文では、Turner,K.A.の2010年、2014年の論文を引用し、西洋医療に加えて漢方や補完医療などを含む統合医療の場合、劇的寛解事例から抽出される要素として、SOC (Sense of Coherence:首尾一貫感覚)が高かったという指摘もあった。本研究では、昨年度の研究会で講演して頂いた島袋隆医師の患者さんで劇的寛解を経験された方を対象に、i)Turner,K.A.が抽出した9つの要素、ii)幸福度調査における3つの要素、iii)日本版Well-beingの質問項目を軸にインタビューを計画した(調査計画の提案は高見佐知研究員、ヒアリングは未実施で研究倫理審査の申請準備中)。SOCの重要性に鑑み、対象者のSOCをヒアリング項目に組み込むことについても共有した。そして質問内容に含まれる項目としてのWell-beingについても意見交換も行った。また、丁寧なインタビューを実施すれば貴重な情報が得られることは確かであるが、比較対象の必要性についても指摘があった。すなわち劇的寛解を経験された人であるが、Well-beingに対する影響を考えていないという人との比較をする必要性(川上教授)も確認し、加えてWell-beingは主観的な観点からしか測定できない事に留意すべきであるとの意見(木下研究員)も共有した。

(2)末期・不治とされる疾患からの劇的寛解を経験する人々の特徴の抽出の計画

この領域については、秋山研究員によって精力的に以下の様な分析計画が構築され、具体的な分析の方向性が提案された。劇的寛解とは、従来の医学的知見では治癒困難あるいは不治とみなされていた疾患が、医学的には説明のつかない形で寛解または退縮する現象を指す。特にガンの研究領域においては、こうした寛解は「稀な例外」とみなされ、薬物療法・手術・放射線療法などの従来型の治療に重きが置かれてきた。しかし進行ガンの治療が奏功しなかったり、患者自身が選択を中止した状況下で、完全寛解に至った症例が一定数報告されている。そこで上記の検討を踏まえ、Turner,K.A.によって抽出された劇的寛解を経験した人々に一貫して見られる9つの要素をi)心理的特性、ii)行動科学的・ライフスタイル特性、iii)生物学的・免疫学的メカニズム、iv)社会的・スピリチュアル的な特徴に集約し多角的にレビューする計画が立てられた。具体的には、Cochrane共同計画による系統的レビューや質的症例報告、臨床研究、心理神経免疫学の知見など、多岐にわたる査読付き文献を参照しながら、医学的には説明困難とされる回復をもたらす可能性のある収斂的パターンを横断的かつ総合的に検討することとした。すなわち、i)2000年から2025年の間に発表された査読付き論文、学位論文、または系統的レビュー、ii)がん患者、あるいは慢性疾患患者のうち、「予期しない」もしくは医学的に「説明困難」な寛解が確認された研究、iii)寛解に寄与する「心理的」「行動的」「生物学的」「社会的・スピリチュアル的」要因を分析したもの、iv)統合医療に関わるCochrane系統レビューや高品質のメタアナリシス等を取り上げることとした。さらに、データを伴わない編集的コメントのみの論文、英語以外の言語で執筆され有力な英語文献から言及のない論文、周辺情報に乏しい単

一症例のみを扱った報告は分析対象から除外する方向で分析を進める計画とした。

該当する研究を定性分析ソフト(MAXQDA)にインポートし、劇的寛解に影響を与えたと思われる上記の4領域に沿って関連文献をコード化する手法を採用する計画を立てた。結果として、「心理的要因」としては、レジリエンス(回復力)、楽観性、主体的に健康を管理する姿勢、感情の処理、ポストトラウマティック・グロース(外傷後成長)等が、「行動面的要因」としては、抗炎症的または代謝的に考慮した食事の導入、日々の身体活動やマインド-ボディ系の実践、補完代替医療の活用といった大胆なライフスタイルの変化が多く報告されたり、「生物学的要因」には、強固な免疫応答や全身性炎症の低下、代謝最適化、場合によってはエビジェネティックな再プログラミングが示唆されるのではないかとこの予想が立てられた。「社会的・スピリチュアルな要因」では、強い人間関係のサポートや精神的実践、明確な人生の目的意識などが重要な役割を果たすのではないかとこの仮説も提示された。これらの領域が相互作用することで相乗効果を生み出し、自然寛解または病状の逆転を促す「好循環」を形成するのではないかとこの推論も指摘された。以上の分析枠組みで仮説・推論として提示した内容を検証するため、計画した分析手法を援用し検討対象文献をテキストマイニングで分類・統合する作業(高松研究員担当)を進めることとした。

(3)「ヘルスリテラシー」に関わる先行研究との関連

また、「健康」と「意識」の関連性を考察する上で、この研究の先行研究である「ヘルスリテラシー」(基本的健康情報を取得、理解し、評価活用する能力)で得られた知見も参照した。すなわち「ヘルスリテラシー」のレベルを把握するためのアンケート項目で、「けいはんな学研都市圏・日本全体」と「EU・オランダ」の間で大きな差が見られたものは、「生活習慣と健康の関係」「健康改善のための意思決定」であった。これらの項目は、回答者の「評価」や「活用」に関わる項目で、「意識」と深く関わるものであると指摘できる。個人・社会全体の「ヘルスリテラシー」の向上は、健康の維持向上に繋がるものであり、その向上を支える社会的仕組みの整備も同時並行で推進されることが求められる。たとえば個人・社会全体の「ヘルスリテラシー」の向上因子、換言すれば「意識」への影響因子として、社会関係資本(ソーシャルキャピタル)の充実度等にも着眼し、研究を進める上で考慮に入れた。

その具体的な仕組みの一つが、市民一人一人の健康を見守り、安心感を与える仕組み(=社会的処方)であり、医学的処方に加えて地域活動・サービス等に接続する取り組みである。これは、「良好な人間関係」「何らかのつながりの感覚」を保持することによる「幸福な意識の向上」を促進するものであり、健康や幸せを実現している人々に共通する要素である。現に厚生労働省は、自治体に加えて学校・企業も含む地域の「ソーシャルキャピタル」を活用した健康な街づくりを進めている事からも、その有効性が評価されていることが分かる。したがって「ヘルスリテラシー」の向上も、人を健康と幸せに導く「意識」を高める重要な要素であると指摘できよう。

今後の課題・期待される効果

劇的寛解事例に関する論文収集と分析を通して、「意識」と「健康」の間には一定の相関関係があるのではないかと、この仮説にたどり着くことができた。そこで、本研究の現時点での到達点について評価することが課題となる。そのため、2025年度には医療専門職者の目を通した本研究の仮説・推論の検証をねらいとして、また研究成果の社会発信として、「意識」と「健康」に関するシンポジウムを「けいはんな万博2025」の「ウェルビーイング・ウィーク」の一環として開催することとした。



研究代表者

新福 洋子

広島大学大学院
医系科学研究科教授

(撮影：サイエンスポータル)

グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと科学者の役割を検討し、未来に続く若手世代がそうした議論に参加し、国際的な活動のスキルを向上するために、分野横断的な若手～中堅の研究者のネットワークを形成する。分配的正義に関する最近の動向を、文献、国際会議の参加者からの聞き取りによる調査や国際会議に合わせてイベントを組み、議論を展開する。それらの議論の結果を積み上げ、論文として発表する。

参加研究者

氏 名	所属・役職
新福 洋子 (研究代表者)	広島大学大学院医系科学研究科教授
隠岐 さや香	東京大学大学院教育学研究科教授
狩野 光伸	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授 同大学副理事 (未来人材創生 (SDGs 社会共創・DEI・ 附属学校園) 担当)、附属学校機構長
近藤 康久	総合地球環境学研究所基盤研究部教授
坂元 晴香	聖路加国際大学公衆衛生大学院客員准教授
標葉 隆馬	大阪大学社会技術共創研究センター准教授

研究目的と方法

人類は現在、気候変動や感染症、紛争といった世界規模の惨事を抱えている。グローバルには、その影響を直接的に受ける人、間接的に受ける人、影響を受けにくい人がある。感染症を例にとると、ワクチンの世界的な分配の不平等は、健康格差に加え、渡航の可否にも渡り、機会の損失という不平等を生み出した。感染症は一部でも残ればそこから変異する可能性が残され、残りの人類にも不幸な未来を生み出しかねない。人類の未来と幸福のためには、科学技術から得られる恩恵を、グローバルに公正に分配する仕組みが必要である。本プロジェクトの目的は、分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと、その達成に向けて科学者はどのような役割を担うかを検討することである。

研究方法

1. チームビルディング：参加メンバーによるオンライン会合によって、テーマに関し感じている課題を共有し、以後の研究活動について合意を得る。
2. 文献調査：分配的正義、科学ディアスポラ、科学技術外交、特に現存する国際団体の役割に関する最近の動向を文献や国際団体の委員からの聞き取りによって調査する。
3. 国際会議での議論：参加メンバーとの議論によって抄録をまとめ、国際会議にアジェンダを提出する (Global Young Academy (GYA) 総会・学会、WSF等を想定)。

4. 論文執筆：参加メンバーで議論した内容をまとめ、論文化する。

2024年度の具体的取組と実績

2024年7月31日 第4回会議

第4回オンライン会議では、「分配的正義」を主題に、災害や感染症におけるリソースおよび成果物の分配、公平性の可視化について多角的な議論が行われた。鹿嶋小緒里氏 (広島大学IDEC国際連携機構准教授) との対話では、健康・自然・社会の三領域にまたがる指標の設定と測定が重要であり、地域固有の指標や「ソーシャルバウンダリー」の枠組みを用いた不足部分の把握が求められることが示された。行政との連携や住民のまちづくり意志との共創の重要性も浮かび上がった。神原咲子氏 (神戸市看護大学教授) との議論では、災害支援における支援格差を「時間・空間・社会的属性」の3軸で可視化する手法が提案され、被支援者の不平等な構造と、研究者の介入のあり方について議論された。狩野氏との対話では、行政内の既得権構造やリソース配分の偏り、全てを平等にすることの非現実性が指摘され、現実的な線引きと分配原則の再考が必要とされた。

ワクチン配布に関する国際事例も取り上げられ、特にインドネシアでのインフルエンザ・ワクチン問題やCOVID-19パンデミック下でのゲノム情報、臨床試験、知的財産の扱いなど、先進国と途上国の間に存在する構造的な格差が浮き彫りになった。坂元氏からは、来年5月に正式採択が予定される「パンデミック条約」に関する情報が共有され、生命に関わる科学技術が外交交渉の手段とされる現状への問題提起と、技術移転の必要性が強調された。分配だけでなく、研究や政策決定に対する「参加の平等性」も重要視されるべきとの視点も加わり、分配的正義の再定義が求められている。

今後の方向性としては、稲葉雅紀氏 (アフリカ日本協議会国際保健部門ディレクター) などへのヒアリングを実施し、各メンバーが自身の専門領域から3軸 (時間・空間・社会的属性) を用いた具体事例を持ち寄ることで、分配の現状と課題を多角的に把握・分析していく。その上で、科学者の役割を再定義し、成果物の公平な分配のみならず、科学的知見の創出過程における参画や責任のあり方についても議論を深めていく。次回の会議では、持ち寄られた事例を元にさらなる議論を行い、2025年5月までに論文や国際会議での発表を目指す方針が確認された。

2024年9月27日 第5回会議(稲場雅紀氏ヒアリング)

第5回オンライン会議では、稲場雅紀氏を招聘し、COVID-19を中心としたワクチン政策やグローバルな分配構造、科学と政策の連携、陰謀論への対抗策など多岐にわたるテーマが議論された。特に、ワクチン製造・供給過程での不均衡、COVAX (COVID-19 Vaccine Global Access: 新型コロナウイルス感染症のワクチンを複数国で共同購入し、公平に分配するための国際的な枠組み)の機能不全、製造拠点となる国の国内不公平(例: インド)などが指摘され、科学的知見の成果がどのように公平に分配されるべきかという問いが繰り返された。

また、南アフリカでのJ&Jワクチン製造ミス事例や、サプライチェーン強化に必要な技術移転の壁、知的財産権とパンデミック条約の交渉の行き詰まりも話題となり、グローバル・サウスを含む新しい秩序の必要性が確認された。さらに、アフリカ現地に根強く残る反ワクチン思想の背景には植民地支配の記憶や権威主義政権による人権抑圧があることが指摘され、科学的・思想的両面からの「脱植民地化」の重要性が論じられた。

中国や新興国のワクチン外交、mPOX (サル痘ウイルス感染による急性発疹性疾患) 対応の不備、そして科学・政策の距離の問題も顕在化した。特にKMロジスティック社や日本の天然痘ワクチン供給を巡る問題は、日本の過去の薬害スキャンダルと重なる構図として厳しく批判された。陰謀論や反ワクチン思想がSNS上で拡大する現状を「ヘゲモニー闘争」と位置づけ、科学者やジャーナリズム、市民社会の協力による戦略的対抗の必要性が強調された。教育や正しい情報発信だけでは不十分であり、構造的対抗策が求められている。

2024年10月15日 第6回会議

第6回オンライン会議では、分配的正義と科学知の不均衡をめぐって多角的な議論が交わされた。近藤氏は、共創の場(ナスコンパレー、COINEXTなど)における「現地参加できる者」と「できない者」との間に生じる情報格差と排除の構造を提示し、資源へのアクセスの公平性がイノベーションの倫理に関わる問題であると提起した。子育て世代や学生、ボスドクなどの不安定な立場の人々が、構造的に排除されやすいことが示された。

新福は、自身の経験からも現地参加の難しさを実感しており、日本の制度設計に改善の余地があると述べた。標葉氏は、国内でも制度設計による格差が顕著であり、それ自体が分配的正義の問題だと指摘した。隠岐氏は、心理的障壁や文化的な疎外感といった「アクセスのコスト」も含めて、情報格差を考えるべきとし、同じ空間にいても疎外感から参加できない層が存在することに言及した。

さらに標葉氏は、自身が執筆中の教科書の内容を紹介し、ISSCR (International Society of Stem Cell Research: 国際幹細胞学会)の倫理指針やニューロテック指針を参照しながら、知識と技術への公平なアクセス、地域格差・属性格差の是正、構造的な不正義への対処の必要性を強調した。歴史的背景から形成される制度格差の重要性にも言及し、生物多様性条約やカルタヘナ議定書、名古屋議定書などの事例を交えて解説した。

新福は、アフリカとの共同研究における立場の不均衡や、Publication Feeの免除が研究協力の枠組みに影響する実態を

共有した。隠岐氏は、知の流通経路そのものが植民地主義的であり、その構造を組み替える必要があると述べた。Indigenous Knowledgeとの接続や知の還元をめぐる取り組みにも言及した。

坂元氏は、ワクチン政策に関する稲場雅紀氏のヒアリング内容を紹介し、グローバルな制度設計において、当事者の声が届かない構造の課題を共有した。また、研究者と民間企業が担う役割の違いや、政策形成への市民参加の難しさが強調された。

反ワクチン思想や陰謀論については、標葉氏が「正しい情報提供はむしろ信念を強化することがある」との研究結果を示し、情報提供の方法としては「抑制的な心のケア」や「間層に向けた振る舞いの工夫」が必要とされた。科学者が取るべきアプローチとして、誠実な振る舞いの蓄積や、保証制度の整備・周知が信頼構築に重要であるとの認識が示された。

最後に、新福は、分配の仕組みの検討にあたって、制度格差や歴史的背景に着目し、制度設計そのものが知識の分配に直結しているという視点を確認した。この会議では、知識や技術の配分をめぐる制度的・心理的・歴史的構造に深く踏み込んだ議論が展開され、科学と社会をつなぐための新たな視点が浮き彫りになった。

2024年11月20日～23日 World Science Forum 2024参加

世界の科学コミュニティでの議論の動向を探り、GYAの活動のアップデートも受けることができた。詳細は別途報告書にて報告。

2024年11月30日 世界災害看護学会登壇

パネルディスカッション|今後に向けた政策提言

本セッションでは、政策立案と現場の橋渡しに焦点を当て、保健、科学、政治、国際協力の観点から「より良い未来」に向けた提言を行った。モデレーターは神戸市看護大学の神原咲子氏が務め、多様な立場から以下のパネリストが参加した。

- ・萱野亮馬氏 (WHO神戸センター): 国際保健と災害対応の専門家として、WHOの視点から課題と展望を提起した。
 - ・新福洋子氏 (広島大学): 助産師教育・グローバルヘルス研究の立場から、地域と世界をつなぐ実装知を共有した。
 - ・阿部啓士氏 (医師・衆議院議員): 医療従事者・政策決定者としての経験を基に、現実的な制度改革の可能性を提案した。
 - ・ユディ・アリエスタ・チャンドラ氏 (インドネシア大学): アジアの視点から、地域連携と脱植民地化への展望を示した。
 - ・ラジブ・ショウ氏 (慶應義塾大学): 防災と持続可能性の研究者として、科学的根拠に基づく政策設計の必要性を強調した。
- 多分野の専門知と経験を持つパネリストによる議論を通じて、包摂的かつ持続可能な政策形成に向けた道筋を探った。

論文執筆

論文の素案を作成し、共著者で共有した。ナミビアの研究者からはコメントがあり、パナマの研究者からのコメントを待っている段階である。



今後の課題・期待される効果

- ・論文の素案ができたのが年度末であり、ブラッシュアップにはやや時間が必要である。
- ・この内容を国際的に発信するための戦略が必要であり、一つはWSF2024で再会したAmal Amin氏の主催するWomen in Science without Bordersの国際フォーラムを2026年7月に日本開催することとした。WSF2026に向けても活動を進めたいと考えている。

組織、分野、世代を越えて 語り合い、学ぶ。

2013年度より、国際高等研究所の活動に関わる大切な知的資源を社会に発信・還元し、講師や参加者の気付きと学びにつながる出会いの場となる、様々な交流事業を行っています。参加者の所属や専門分野、地域、世代の境界を越え、対話を通じて交流する場です。



けいはんな「エジソンの会」

最先端技術の第一人者を国立研究機関、大学、企業などから招聘し、質の高い講演を拝聴するとともに、参加者と講師陣の対話と相互理解を目的としたインタラクティブセッションに十分な時間を割いて開催するセミナーです。最先端の科学技術の学びを介して、けいはんな学研都市の研究者や市民の方々に知的交流する場を提供しています。

けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するため、国際高等研究所が知的ハブとしての役割を果たすとともに、立地機関の研究者や技術者のコミュニティを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目指し、2016年6月21日にけいはんな「エジソンの会」を発足しました。

当会合は、長期的な視点のもと、けいはんな学研都市の核となる科学技術の確立に寄与するとともに、けいはんな学研都市に集結した研究機関や企業が連携による相乗効果を発揮することで、より高い価値を生み出し続けられるサイエンスシティづくりを目指しています。核となる科学技術と産業の領域が育まれることにより、人、モノ、カネ、情報が自ずと集まる、都市の新たな持続可能モデルを確立したいと考えています。

会合の発足に当たっては、社会のニーズに焦点を充て、社会実装を伴う数々の発明を通して社会に貢献した「トーマス・エジソン」の偉業に倣い、「エジソンの会」と命名しました。

会合の運営に当たっては、リアル開催での評価（フェイスツーフェイスでの討議の重要性やクローズな場での得難い情報提供など）を重視し、他のイベントとの差別化も含めてリアル開催を継続していく方針です。



■2024年度開催実績

Alife(人工生命)が拓く新たな世界へ ～Post AIが問いかける未来～			
第46回会合 2024.10.24	池上 高志	東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻 教授	「AIとALifeは、どこまで生命か」
	岡 瑞起	筑波大学 システム情報系 准教授 株式会社ConnectSphere 代表取締役	「Artificial Life:towards symbiotic intelligence ～知能と人間が共生する社会を目指して～」

現在の科学技術では到底解明が及ばない「生命の謎」を、人工生命 (Artificial Life) のアプローチにより成し遂げようという研究を取り上げました。人工生命の研究は、「コンピューターの父」として知られるフォン・ノイマンが、生命の基本的な特性を理解しようと人工生命モデルを作り、生命の領域に「数学的」に切り込んだのがその始まりです。

当研究のパイオニアとして世界をリードし、学際的な視点を通して「生命の神秘」を探究されている両氏を招聘し、人工生命の最前線に迫りました。人間の本质と生命の存在、心と身体の関係、意識と身体性、生命への宗教的側面からのアプローチなど、人工生命の研究は科学技術の分野に留まらず、人文学、社会科学等様々な領域にわたる研究であることを理解しました。会場からの質問に対し、池上氏と岡氏が激論を交わす場面もあり、いつも以上に熱気あふれる会合となりました。

宇宙の未来 ～月/火星への挑戦～			
第47回会合 2024.12.6	中須賀 真一	東京大学大学院 工学系研究科 航空宇宙工学専攻 教授	「宇宙ビジネスの新しい潮流と今後」
	澤井 秀次郎	宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 宇宙科学研究所 教授	「月面探査-SLIM ～精密な着陸で切り開く新しい宇宙探査の扉～」
	船瀬 龍	東京大学 大学院工学系研究科 航空宇宙工学専攻 准教授 宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 宇宙科学研究所 教授	「深宇宙へ ～超小型探査機を太陽系のあらゆるところへ送り込む～」

米国が主導する「アルテミス計画」(人類を再び月へ送り、月を起点とした深宇宙への探索を行う)の第1歩として、2024年1月20日未明、日本のプロジェクト (SLIM) が月面着陸に成功し、大きな成果を収めました。

今後の宇宙探査への足掛かりとなるSLIMの重要な成果は、月面の目標地点への正確なピンポイント着陸および超小型ロボットによる月面移動探査です。

世界の宇宙ビジネスを牽引されている中須賀氏にリード役を務めて頂き、深宇宙探査に新たな可能性をもたらした日本のトップランナーをJAXAよりお迎えし、日本が世界に誇る「ホット」で「衝撃的」な研究開発と活動成果および今後の展望についてお話を頂きました。世界に先駆けた日本独自の数々の挑戦と成果は、日本人として誇らしいものであり、今後さらなる多国籍との連携を深めていくことで、輝かしい宇宙の未来が開けていくであろうことを実感した会合となりました。

次世代エネルギー ～核融合が切り開く未来社会～			
第48回会合 2025.2.5	吉田 善章	自然科学研究機構 核融合科学研究所 所長	「地球を救う宇宙の力 ～核融合エネルギーの革命～」
	武田 秀太郎	九州大学 准教授 京都フュージョニアリング株式会社 共同創業者	「フュージョンにより新たな産業と未来を切り拓く ～京都から世界への挑戦～」

核融合エネルギーは原子力(核分裂)とは根本的に異なり、21世紀で最も革新的で環境に優しいエネルギー源として注目されています。生命が地球上に十億年以上を掛けて作り上げてきた炭素循環の世界が崩れつつある中、「地上に太陽を作る」という人類の存続をかけた画期的な挑戦が始まりました。人類未踏のフロンティアを開拓する大規模事業として核融合の研究開発に取り組む日本のリーダーと、技術開発の独創性と先進性により、世界から巨額の資金調達を実現している日本初の核融合スタートアップの共同創業者を迎え講演を頂きました。地球の危機を救う核融合エネルギーの最新動向と最前線での取り組みに触れ、持続可能な地球の未来について議論を戦わせました。

台風や豪雨の影響により、2024年度は3回の開催となりました。けいはんな学研都市の立地機関をはじめ、全国から延べ90機関166名の参加が得られ、けいはんな学研都市において定着した活動となっています。

今期は、けいはんなと結びつきの深い近郊の大学へ広く案内を行い、学术界への会合の浸透を図りました。学生や若手研究者の参画を促すことにより、これまで以上に活発な議論の場を提供できたものと思います。

2025年度も、前年度に引き続き、我々の生活や社会に大きな影響をもたらすと思われる分野や技術に焦点を当て、未来に向けて取り組むべき研究対象、技術開発対象は何かを考察していきます。また、けいはんな学研都市の立地機関の共同を推進するため、さらなる「ネットワーク構築」と「協業を生むための土壌づくり」にも意欲的に取り組んでいきます。

当会合は、理化学研究所および関西文化学術都市推進機構より後援を頂いております。

また、講演に際しては、理化学研究所AIP副センター長の上田修功氏にスーパーバイザーをお願いし、会合の企画・運営に参画頂くとともに、インタラクティブセッションへご登壇を頂いております。



満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

〈「新たな文明」の萌芽、探求を!〉プロジェクト

「近代文明」は、科学・技術文明として隆盛を極める一方で、地球環境システムの不全や、人類の分断と抗争も生み出してきました。それに立ち向かうためには、新たな自然観の獲得とともに、歴史、文化、宗教などを核とする「新たな文明」が肝要となります。2022年度からは、年度ごとに一つのテーマを設定し、人類的遺産の形成に貢献した人物などを「ゲーテの会」での講演テーマに取り上げ、新たに立ち上げた「meta鼎談（哲学×科学×技術）」及び「市民懇談（round table）」につなげて、広く市民の参加を得ながら実践的議論を深め、けいはんな学研都市ならではの取組を行っています。

2024年度テーマ：「生命論」

モチーフ：「生命（いのち）の輝き」を探る

西洋近代合理主義の経済的豊かさの下で、私たちは自らの生存基盤に無頓着になりつつあり、一方で、昨今の巨大自然災害やパンデミックなどで、否応なく「生と死」の問題に直面しています。我々の真に豊かな未来を切り拓くために、本来の「生命（いのち）の輝き」とは何かを探っていくことを目指して、以下の4つの会合を開催しました。各会合にて生命論について広範囲の意見交換が繰り広げられ、「生命（いのち）」をどう捉えるかを考えていく中で、自己と他者との関係、宗教と科学の立場の相違、人類と自然との関わり、世界平和などにも話が及びました。なお、2025年度は「資本論」を取り上げる予定です。

満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

2013年8月以来、「近代合理主義」の光と影を追い、新たな文明の萌芽を探求しています。

分野	講演者	テーマ
思想・文学	竹村 牧男 東洋大学名誉教授	「自心の源底」を尋ねて ～空海の生命論への一視点～



【第94回開催概要】 2024年5月23日（木）18：00～20：00

＜参加者数＞ 110名（会場参加者24名、オンライン参加者86名）

「自心の源底」の出处は、空海の主要著書『十住心論』の冒頭の文章にあり、その「十住心」の各段階における「心」の有り様の解説がありました。続いて、空海によって伝えられた曼荼羅と四種曼荼羅との二重構造などの解説に基づきつつ、真言密教の核心に触れる言葉「即身成仏」の「即身」とは、「この身に即して」ではなく「他者と相即する身」のこと、「自己」と「他者」、「自己」と「諸仏諸尊」は相即渉入の関係であると解すべきこと、そこに一個の「いのち」があると、丁寧な説明がありました。参加者からも多くの質問が寄せられました。①キリスト教は、絶対を絶対で否定し相対世界に返る真言密教の考えに包含されるのではないのか。②真言密教の「即身成仏」は、浄土真宗の「平生業成」の言葉と共鳴するのか。③「他者」とは、人間に限らず動植物や自然も含むのか。空海の視野は人類全体に及んでおり、世界平和を展望するに足る思想があるのではとの指摘もあり、世界観、人間観、死生観など多岐にわたる真摯な質疑応答が続きました。

分野	講演者	テーマ
思想・文学	吉田 量彦 東京国際大学商学部教授	「直観」から勇気をもらう —自然研究者ゲーテがスピノザに学んだこと



【第95回開催概要】 2025年2月13日（木）18：00～20：00

＜参加者数＞ 92名（会場参加者18名、オンライン参加者74名）

ゲーテの著作物でスピノザに関わる記述を辿り、スピノザの言う「直観」とは何か、ゲーテがいかなる「直観」の理解の下にどのような「勇気」をもらったのかについて、独自の論証を踏まえてのご講演をいただきました。スピノザの言う「直観」は、デカルト的客観的分析を経ずとも、理路が了解できれば分かる「知」の観念である。このスピノザの考えはゲーテに、観察を突き詰めることにより、研究対象たる個物そのものに内在する「神＝実体」に迫り得るとの信念を抱かせ、いっさいの事物の観察に捧げる勇気を与えたのではないかとのお話でした。質疑応答では、①スピノザの言う3種の認識（想像的、理性的、直観的認識）の関係、②「直観」と仏教思想、神道の八百万の神における、「神」の在り様の差異、③「直観」と科学技術、特に人工知能の発展とシンギュラリティ等との関係について議論を深める必要性にも話が及びました。先生が最後に紹介された「神の直観的認識から生じる心の安らぎこそ、幸福に他ならない（スピノザの著書『エチカ』より）」という言葉がスピノザのすべてを語っていると思えました。

けいはんなmeta鼎談(哲学×科学×技術)

異分野の学識者3名が、哲学・科学・技術の切り口でテーマを深掘りし、次代を拓く端緒を探ります。

分野	講演者	モチーフ
宗教哲学 生命科学	松山 大耕 妙心寺退蔵院副住職 平野 俊夫 大阪大学前総長 大阪国際がん治療財団理事長	「生命(いのち)の輝き」を探る ～新型コロナウイルスから学ぶ
文化人類学	石井 美保 京都大学人文科学研究所教授	



【第3回開催概要】 2024年7月13日(土) 14:00～17:00

<参加者数> 87名(会場参加者25名、オンライン参加者62名)

冒頭に平野先生から感染症の人類史的意味についての説明があり、各鼎談者から取り上げられた論点は、①新型コロナウイルス禍からの学び、②科学技術の発展と人間性(こころ)の行方、③感染症に逆照射される「共生社会」への希望。それぞれの論点について、人間社会における野性への鋭利な眼差しの必要性、科学・技術の発展と自然破壊とのトレードオフ関係への洞察、また、人間社会の多様性の爆発的進展と対立の深まり、その矛盾とその克服などについて意見が交わされました。議論していく中で、人類は単一種であり、地球市民であることの自覚が必要。コロナ禍は「生権力」概念を考える機会。科学と宗教における生命観は対照的で、他者(環境)の関係性の中に生命があるか否か。エッセンシャルワーカーをケアする所に宗教の出番がある。一神教世界で続発する対立抗争を超えるために、多神教世界である日本の果たすべき役割は大きい。など、鋭い指摘が続きました。

けいはんな市民懇談(round table)

市民や専門家など様々な人々が意見交換し、学びあい、新たな文明の萌芽につなげます。

役割	登壇者	モチーフ
モデレーター	加納 圭 滋賀大学教育学系教授 国際高等研究所客員研究員	「生命(いのち)の輝き」を探る
メンター	平野 俊夫 大阪大学前総長 大阪国際がん治療財団理事長	



【第3回開催概要】 2024年9月28日(土) 14:00～17:00

<参加者数> 43名(会場参加者17名、オンライン参加者26名)

市民の方から提起された三つの論点、①「新たな精神(哲学)の希求」、②「科学と生命(人為と自然)の相剋」、③「いのちの実相」に関して、会場参加者を3グループに分けて、グループ討論とその結果を持ち寄っての全体討論を繰り返し、三つの論点ごとに議論を深めていただきました。討論に入る前に、メンターの平野先生から「meta鼎談」での議論の概要紹介があり、参加者からは、人類の多様性の功罪を巡って、自然的・文化的背景を探ることが不可欠。科学(人為)、生命(自然)の関係の均衡点を探ることが肝要。生の永続性は死に媒介されてこそ存在する。生命(いのち)の理解に当たっては、古今東西の哲人が思索してきた「神・魂」「超人」「言語・意識」「記憶・時間」などの概念を顧みることが重要、などの意見がありました。今回の論点は、「何を研究すべきかを研究する」という高等研自体のテーマを探究する取組みにも、「大阪・関西万博」や「けいはんな万博」の活動にも連なるものであり、議論の盛り上がり余韻を残しながら盛況裡に「市民懇談」を終えました。

〈「新たな文明」の萌芽、探求を!〉プロジェクト

趣旨

近代合理主義を超えて、その自然観、人間観、死生観を問い直す。
近代化の光と影を追い、未来を照射する。



満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

IIAS塾ジュニアセミナー 「独立自尊の志」養成プログラム

『IIAS塾ジュニアセミナー「独立自尊の志」養成プログラム』（「IIAS塾ジュニアセミナー」）は、18歳前後の高校生・大学生を対象として行われるリベラルアーツを旨とする教育・学習プログラムであり、受講生のリベラルアーツ学修への興味と関心の涵養とともに、自学・自習への契機の提供を目的としています。

《IIAS塾ジュニアセミナーの三つの特色》

① リベラルアーツを旨とする全人教育の場

テキストを中心とした言語表現を旨とする討論を主体としつつも、身体も使った体験学習もプログラムに取り入れ、本セミナーならではの「全人教育」を試みています。

② 先達との協働で学びの楽しさを体感する場

第一級の学者の協力を得て学びの本質、意義について教示を受け、また大学院生を中心として構成されるTA（ティーチングアシスタント）の支援のもとにグループ討議を行い、自由にテーマを設定し、議論を深めます。ここは、講師、TA、受講者が対等の立場で意見を述べ、それを相互に受け止める場でもあります。

③ 学校の枠を超えた若者の知的交流の場

地域・学校・分野を超えた、自由な雰囲気の中で議論を交わすことのできる場であると同時に、人生観、学問観に影響を与える知的刺激に満ちた場となっており、通常の学校生活では得られない交流の場を提供しています。

本セミナーは2016年春季以来、毎年、春季（3月）と夏季（8月）の年2回、国際高等研究所（高等研）の宿泊棟を活用し、2泊3日の日程で対面方式により開催してきました。2020年春季と夏季はコロナ禍を考慮し、中止せざるを得ませんでしたが、2023年夏季からは本来の対面・合宿方式で開催し、寝食を共にして学ぶ機会としています。2025年春季までに延べ17回実施し、全国の73校から384名が参加されています。

プログラムの内容は、『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録をブックレット化してメインテキストとし、「思想・文学」「政治・経済」「科学・技術」の各分野に係るテーマを取り上げています。その企画運営は、国際高等研究所の特任研究員の方々（金澤洋隆、真鍋公希、山根直子、児玉菜、）にお力添えいただいています。

2025年度については、教育環境の変貌を踏まえ、「休講」の措置を執ることとしました。2016年以来10年間にわたり開講し、多くの方々のご支援をいただき、好評のうちに回を重ねることが出来ました。深く感謝申し上げます。

1) 思想・文学分野

テーマ：「本居宣長」に学ぶ
～「もののあはれを知る」と「漢意」、
その多様性と先駆性～
講 師：田中 康二 皇學館大学文学部教授

2) 政治・経済分野

テーマ：「大河内正敏」に学ぶ
～「科学主義工業」こそ、
産学連携「理研モデル」の核心～
講 師：齋藤 憲 専修大学名誉教授

3) 科学・技術分野

テーマ：「梅棹忠夫」に学ぶ
～「文明論」的視点を持って物事を
考える。「旅」はその基盤～
講 師：小長谷 有紀
国立民族学博物館名誉教授

4) 体験学習(心身の学)

テーマ：造形作品の共同創作を通じて
体得する「もう一つの知、身体知」
講師・創作支援：岡本 道康
森のねんど研究所代表
(人形作家)
講師・活動支援：村上 忠幸
京都教育大学名誉教授

2024年夏季

8月7日（水）～
8月9日（金）
（2泊3日）

人物学習型

*対面・合宿方式で
開催

1) 思想・哲学分野

テーマ：「ベルクソン」に学ぶ「直観」の哲学
～世界の平和と人類の幸福のために～
講 師：瀧 一郎 大阪教育大学名誉教授

2) 政治・経済分野

テーマ：岩倉使節団150年を機に「日本文明」の再興を考える～受容する文明から需要ある文明へ～
講 師：瀧井 一博
国際日本文化研究センター教授

3) 科学・技術分野

テーマ：「応用をやるなら基礎をやれ」
化学者たちの京都学派
～福井謙一をはじめとする
喜多源逸の後継者たち～
講 師：古川 安
総合研究大学院大学客員研究員

4) 体験学習(心身の学)

テーマ：「アート思考」への誘い（いざない）
～「対話型鑑賞」と「哲学対話」の協働を通じて体得する「もう一つの知、身体知」～
講 師：戸澤 幸作
京都市立芸術大学 美術学部 講師
寺元 静香
公益財団法人大原芸術財団研究員・エドゥケーター

2025年春季

3月26日（水）～
3月28日（金）
（2泊3日）

人物学習型

*対面・合宿方式で
開催

■これまで参加した受講生の所属校(都道府県順)

【高校 61校】岩手県/高田、埼玉県/筑波大学附属坂戸、東京都/富士見丘、富山県/高岡南、長野県/上田、松本県ヶ丘、市立長野、岐阜県/岐阜、愛知県/愛知、愛知教育大学附属、一宮、滋賀県/膳所、京都府/京都教育大学附属、京都光華、京都聖母学院、京都先端科学大学附属、嵯峨野、同志社、同志社国際、鳥羽、南陽、日吉ヶ丘、洛南、洛北、立命館、大阪府/茨木、大阪教育大学附属池田、大阪教育大学附属平野、大阪青凌、大手前、四条畷、高槻、豊中、三国ヶ丘、兵庫県/神戸市立葺合、滝川、長田、灘、姫路女学院、奈良県/市立一条、畝傍、郡山、青羽、帝塚山、東大寺学園、奈良、奈良学園、奈良学園登美ヶ丘、奈良女子大学附属、西大和学園、和歌山県/和歌山信愛、島根県/津和野、岡山県/岡山操山、広島県/英数学館、山口県/大津緑洋、愛媛県/南宇和、福岡県/小倉、修猷館、長崎県/上五島、宮崎県/宮崎東定時制夜間部、沖縄県/N高等学校
【高等専門学校 1校】熊本県/熊本高専八代キャンパス
【大学 11校】北海道大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、女子美術大学、京都大学、同志社大学、大阪大学、神戸大学、兵庫県立大学、畿央大学、広島大学



■セミナー参加者の声

- ・どの分野についても対話を通じてどんどん新たな視点が生まれていったことがとても良かった。自分の考えを超えてくるもの、変えてくれるものに出会えるこんな機会は貴重であった。
- ・普段当たり前だと思っていることでも、人それぞれ違う意見があり、物事を多角的に見ることの重要性を知った。また、学校では自分のイメージがある程度決まっているが初めて会った人と討論することで新しい自分に気づくことができた。
- ・ここで自分が言葉で表現できる範囲では、今自分がどれだけこのセミナーに行ってきたかと言いたいほど、有意義でした。答えを求めて考えるのではなく、疑問を疑問で深めていくことが本当に楽しかったです。
- ・TA(ティーチングアシスタント)さん達の存在が、私にとってとても良い刺激になった。学問に対して誠実で、話してくださる内容には学びが多くて、私達の対話を支えてくださる姿勢は丁寧だった。だから私もTAさん達のような大学院生になりたいと強く思った。
- ・学校で過ごすだけでは満足出来ない部分があった(本心で何かを問うとか)。先生生徒みたいな立場が平等になって話せたんじゃないかと思う。
- ・グループ討議のあとにもいろいろと気になる部分や整理がつかなかった部分があり、同じ宿舎の部屋の人と夜遅くまで話し合ったことが印象に残っています。今回のセミナーでは、お互いの学園祭を見にいたりなど、今後も関わっていききたいと思うメンバーに出会えました。このように思ったのはこれまで参加した合宿で初めてで、同年代の人と真剣に議論したり雑談したりなどして絆を深められたのが良かったです。



高校生・大学生等の「自主的な学びの場」の形成につなげる

■第3回ホームカミングの開催

＜開催趣旨＞参加者相互のネットワークを広げ、皆で学ぶことの大切さをあらためて認識する。
＜参加者数＞ジュニアセミナー卒塾生、TA経験者・特任研究員など9名
＜開催概要＞日時：2025年2月22日(土) 10:00～17:30
テーマ：『森鷗外に学ぶ～日本にも個人主義はありうるか～』(2016年夏季IIAS塾ジュニアセミナーテキスト)
内容：グループ毎の討議や全体での意見交換

■メインテキストの公開開始

2023年12月より、国際高等研究所ホームページで、ジュニアセミナーのテキストを順次公開しています。2025年5月時点で、30件が公開中です。これまでに蓄積されてきた知見を広く一般に公開するとともに、受講経験者の継続的な学びにつなげています。

寄付募集チャレンジ

「IIAS塾ジュニアセミナー」開催については、けいはんな学研都市地域にゆかりのある方々の、あるいはIIAS塾ジュニアセミナーに関心のある方々に支えられたものにしたいと考え、その開催経費については、公益財団法人京都地域創造基金の支援を受けて「寄付チャレンジ事業」に取り組み、篤志寄付を募っておりました。(2025年3月末日で募集を終了)その結果、2018年度から2024年度までに合計41名(団体含む)の方からご寄付いただきました。多くの方のご支援、誠にありがとうございました。

2024年度は、以下の方々が寄付いただきました。(敬称略五十音順)

北岡 征翠、久下 勝也、島中 学、中川 雅永、日根野 健

ご支援いただき、ありがとうございました。

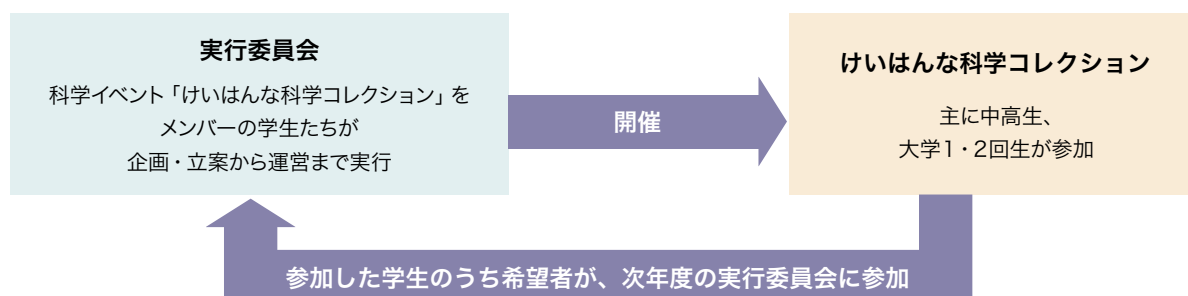
学生の学生による学生のための教養講座

この講座は次世代を担う若い世代を対象とした体験型プログラムです。自ら主体的に考え行動し、若い世代にむけたイベントなどの企画から運営までを学生が主体的に実施する「実行委員会」と、科学を身近に感じる「けいはんな科学コレクション」の2つのプログラムで構成されます。

■プログラム概要

	実行委員会		けいはんな科学コレクション
構成メンバー	大学生、大学院生	参加者	中高生、大学1・2年生
目的	(右の目的に加えて) ・自ら主体的に考え、実行する ・多様な人材と交流する	目的	・社会課題や科学技術に関心を持つ ・自分の将来の選択肢を考える
実施内容	・けいはんな科学コレクション開催(2025.3.16) ・実行委員会ミーティング15回(オンライン含む) ・研究者インタビュー4回 (ATR、RITE、奈良先端大、同志社女子大) ・けいはんなR&Dフェア2024出展(2024.10.5) (活動期間は2024年9月～2025年3月)	概要	・2025年3月16日開催 ・けいはんなの研究者と研究テーマを学ぶ ・AI、放射線に関するワークショップを体験

■実行委員会とけいはんな科学コレクションとの関係（将来構想）



■今後の計画・期待される効果

けいはんな科学コレクションの開催に加えて、けいはんな万博関連イベントへの参加など学校内の活動では経験できない機会の提供を通して、自ら考え、自ら行動できる人材の育成を目指します。

きづミーティング (集合知ネットワーク構築プロジェクト)

研究代表者

駒井 章治

東京国際工科大学
工科学部情報工学科教授
国際高等研究所主任研究員



自然災害の頻発、社会の急速な多様化、世界情勢の不安定化など予測不可能な事象が続く現代において、質の高い情報を迅速に活用するためには、積極的な議論と思考による「構え」が重要です。本活動は、「何を研究するかを研究する」研究所として、近い将来の国際高等研究所が取るべき活動の在り方を示すことを目指します。

参加研究者 (順不同) (所属・役職は2025年4月1日時点)

氏 名	所属・役職
駒井 章治	東京国際工科大学工科学部情報工学科教授 国際高等研究所主任研究員
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター准教授 国際高等研究所主任研究員
杉谷 和哉	岩手県立大学総合政策学部准教授
井出 和希	大阪大学感染症総合教育研究拠点特任准教授
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構教授
定藤 博子	摂南大学経済学部准教授
久木田 水生	名古屋大学大学院情報科学研究科准教授
安藤 悠太	立命館大学大学院政策科学研究科准教授
阪井 英隆	パナソニック株式会社
西村 準吉	佼成学園女子中学高等学校
森本 智史	慶應義塾大学先端研究センター特任助教
田島 知之	玉川大学リベラルアーツ学部准教授

研究目的と方法

先行き不透明 (BANI) な現代において、人類共通の課題解決には日常的な議論が不可欠です。本事業は、コロナ禍以前よりオンライン会合を重ね、JSTサイエンスアゴラも活用し、異分野の専門家による議論を推進してきました。その中で生まれた多くのアイデアを具体化するため、議論の機会増とネットワーク拡大を図り、迅速な問題解決に繋がる「構え」を醸成します。国内外の人的ネットワークの中核を構築し、知恵の深化を目指します。

2024年度実績報告

現代社会は、戦争、右傾化、不寛容など、目に見えない大きな問題による混乱に直面しています。本研究会では、その現状分析と今後の展望について議論を重ね、ELSIやDEIの軽視といった倫理・価値観の矮小化に警鐘を鳴らし、社会への積極的な発信の重要性を再認識しました。けいはんなエリアを多様な想いとアイデアが交差する拠点とするべく活動を推進してきました。

2025年度は大阪・関西万博と並行開催されるけいはんな万博において、「けいはんな大学」構想に基づいたExpo Universityを企画し、学生版ネットワークを構築します。未来の担い手である若者の思考を具体化することを目指し、ポスト万博シティーとしてのけいはんなエリアの事業展開、さらには今後の国際博覧会におけるレガシーとなるパッケージの推進を図ります。2024年度はその準備として、学生ネットワークの構築に取り組んできました。

2024年度研究会実績

通算 第47回	5/21	標葉隆馬 (大阪大学)	「科学技術を社会的な視点から考えるということ」
	10/27	サイエンスアゴラ	「集合知ネットワークを構築する具体的なアクションとは？」
	12/27	駒井章治 (国際高等研究所)	けいはんな大学Kickoff ミーティング



サイエンスアゴラの会場にて

今後の課題・期待される効果

多様な専門性を持つ知を結集し、知的好奇心を刺激する「場」を創設することで、未来を拓く知恵の「核」を構築します。ここから生まれる多様なアイデアの社会実装を目指し、見えない未来に即応し創造的な具体を発出できる会議体のあり方を追求します。このようなネットワーク構築のノウハウを未来に継承するとともに、学生が自律的に学び策を講じるプラットフォームを構築し、「場」としての機能に繋げることを期待します。

けいはんな万博2025プレイベント国際シンポジウム 不確実性ととも生きる一次世代への鍵 Embracing Uncertainty: A Key for the Next Generation



KEIHANNA
EXPO 2025

開催日：2024年11月30日（土）13:30～16:00

会場：国際高等研究所 レクチャーホール（会場 & オンライン ハイブリッド開催）

言語：英日同時通訳あり

主催：国際高等研究所 40 周年企画委員会、けいはんな万博 2025 運営協議会

後援：国立研究開発法人理化学研究所

基調講演1：マイケル・フィンケンタール 米ジョンス・ホプキンス大学名誉教授

「複雑性が支配する世界で不確実性ととも生きる—AIは助けになりうるか？」

Living with uncertainty in a world dominated by complexity: can AI help?

基調講演2：橋本 幸士 京都大学大学院理学研究科教授

「学習物理学の創成」

Foundation of “Machine Learning Physics”

パネル討論：マイケル・フィンケンタール氏、橋本 幸士氏

コーディネーター：鈴木 晶子 国際高等研究所主席研究員、理化学研究所客員主管研究員、京都大学名誉教授

2024年11月30日にけいはんな万博2025運営協議会との共催プレイベントとして、国際シンポジウム「不確実性ととも生きる一次世代への鍵」を開催しました。本イベントでは、AIをサブテーマに掲げ、人類社会が直面する複雑な課題を、分野横断的な視点から議論することを目指しています。当日は、専門家のみならず、一般の方々や学生まで幅広い層が参加し、多様な視点が変わる場となりました。

フィンケンタール教授からは、複雑な世界における不確実性との共存とAIの役割についてのお話があり、学術研究と一般の理解の隔たりを指摘し、不確実性を科学と人文科学の異なる視点から解説いただきました。AIの未来について異なる意見を持つ二人の研究者と、Chat GPT-4に触れ、AI開発における理論と応用の課題、そしてAIがその橋渡し役として果たしうる可能性を示唆されました。続いて橋本幸士教授からは、「物理学を学ぶ」という概念とAIとの関係についてご講演いただきました。AIが新しい物理法則を発見する助けとなりうる可能性を語られ、物理学と人工知能の関係について深く掘り下げたお話が展開されました。シンポジウムの締めくくりとして行われたパネルディスカッションでは、参加者から不確実性やAI、人間の意識といった多様な視点が探求され、「AIの本質が自然現象であるのか、人間の創造物であるのか」という問いを中心に議論が進み、日本の哲学的伝統を取り上げながらAI理解の新しいアプローチを模索しました。またAI技術の進展に伴う利点だけでなく潜在的な危険性についても意見が交わされ、多角的な視点からの検討の重要性が改めて認識されました。

今回のシンポジウムを通じて、多様な背景を持つ参加者が一堂に会し、現代社会が抱える重要な課題を議論する意義を再確認しました。また、当研究所にとって6年ぶりとなる国際シンポジウムの開催は、グローバルな研究ネットワークを構築する上での重要な一歩となり、今後の活動への期待を高める機会となりました。



研究企画推進会議

研究事業の企画及び推進を図ることを目的として、幅広い学問領域の学識経験者を委員とする研究企画推進会議を設置しています。本会議は2015年度に発足しました。一期2年、2025年度に第6期をスタートさせました。研究企画推進会議からの先見と俯瞰による助言や提言を反映し、より有意義な研究活動の実施を目指しています。

第6期委員（任期：2025年4月1日～2027年3月31日）

議長



榎 裕之

国立大学法人
奈良国立大学機構理事長
学校法人トヨタ学園フェロー
豊田工業大学名誉学長
東京大学名誉教授

委員



稲賀 繁美

国際日本文化研究センター名誉教授
総合研究大学院大学名誉教授



小谷 元子

理化学研究所
理事長特別補佐（領域総括）・
開拓研究所所長・
数理創造研究センター
数理展開部門数学応用研究チーム
チームディレクター
東北大学理事・副学長



高橋 義人

平安女学院大学国際観光学部特任教授
京都大学名誉教授



中村 道治

科学技術振興機構名誉理事長



吉川 左紀子

京都芸術大学芸術学部特別教授
京都大学フィールド科学教育研究センター特任教授
京都大学名誉教授

年次報告書の発刊

2023年度の年次報告書「アニュアルレポート2023」を2024年7月に発刊しました。国際高等研究所（高等研）の活動をわかりやすく社会へ発信しています。



高等研ライブラリー（公開中のブックレット）

高等研の研究の方向性をよりよく理解いただくため、活動成果をまとめた研究報告書や「けいはんなゲートの会」のブックレットやジュニアセミナーのテキストをホームページにて公開しています。



関係機関との連携

高等研は国内外の関係機関と連携し、それらが主催するイベントの趣旨に賛同し応援、協力を行っています。



詳しくはこちら

高等研報告書・高等研選書（Amazonにて販売中）

高等研のこれまでの研究事業の成果の一部を「高等研報告書」、「高等研選書」としてまとめています。研究代表者の提唱する研究課題に対して、異分野間の研究者たちが数年間取り組んだ研究の成果や、高等研が主催する講演・シンポジウム・フォーラム等を収録・編集し、学問に精進された著者自らの語りをまとめたものを取り扱っています。詳しく高等研ホームページをご覧ください。

（Amazonホームページからご購入いただけます。）

タイムリーな情報発信

ホームページの内容は常時改訂して高等研の活動を迅速に公表するように努めています。公式SNSでは研究会の活動報告、高等研が主催するイベントのお知らせや日常の出来事などをお届けします。



「高等研チャンネル」



各QRコードからご覧いただけます。

財務・決算報告

国際高等研究所（高等研）は1984年8月に財団法人として設立認可され、その後、制度改正に伴い2013年4月には公益財団法人に認定されました。高等研は設立以来、社会から受託を受けた貴重な財産を安全かつ効率的に管理・運用することに努めています。公益財団法人に求められる財務三基準を満たすことはもちろんのこと、さらに公益に資する活動の拡大に向けて、持続的な財務戦略の構築にも積極的に取り組んでいます。

高等研の資産構成

2024年度末においては、財団の基本財産として11億2千万円の有価証券等を保有するほか、運用資産（2022年度に資産運用規程などの改訂を行い、運用する有価証券について、基本財産から再分類を行いました。）28億6千6百万円などの特定資産、さらに研究所建物などの固定資産と預金などの流動資産をあわせて資産合計は52億7千9百万円です。

高等研の収支

2024年度の高等研の経常収入1億8千2百万円の内訳としては、基本財産や運用資産として保有する債券の利息など資産の運用収入が1億4千3百万円、自治体等からの補助金と企業・個人からの寄付金のあわせて8百万円、特別研究基金より研究活動に充当した振替額19百万円をそれぞれ計上し、さらに、その他として施設使用料など1千2百万円を計上しました。

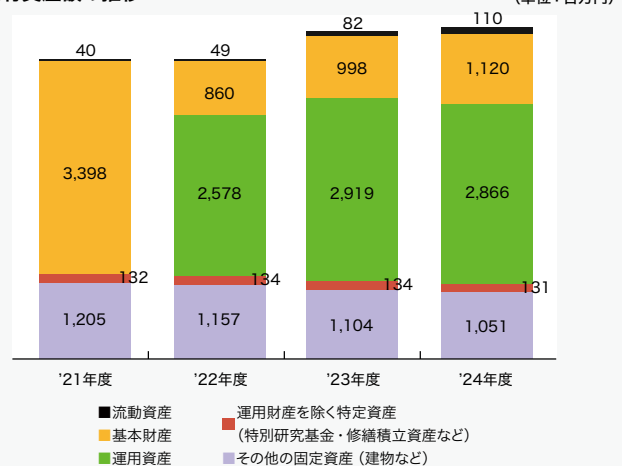
経常費用は、事業費と管理費をあわせた結果、1億9千1百万円となり、2024年度の経常増減額は差引9百万円のマイナスとなりました。また、修繕積立金への繰入額1千4百万円や減価償却などを除いたキャッシュフロー収支は28百万円のプラスとなりました。

資産運用方針

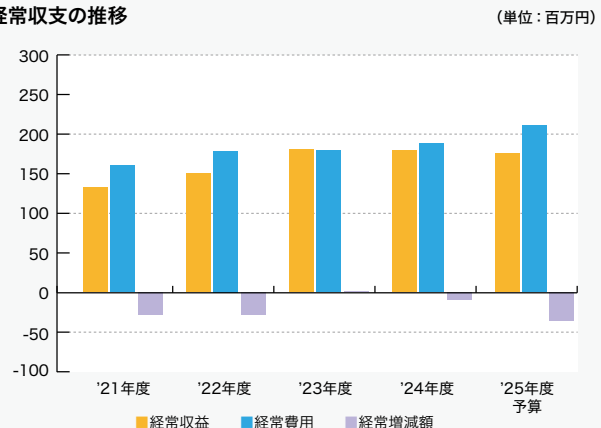
財団の安定的な運営に資するよう、また公益目的事業を継続して実施していくため、財団財政上必要な運用益を、最低限のリスクで確保することを目指します。

上記目標を達成するために、GP I F（年金積立金管理運用独立行政法人）の運用方針を参考に、資産、地域、時間等を分散して投資することを基本とし、運用対象は、投資適格格付を有する債券または価格の透明性と流動性を有する証券取引所上場銘柄に限定しております。

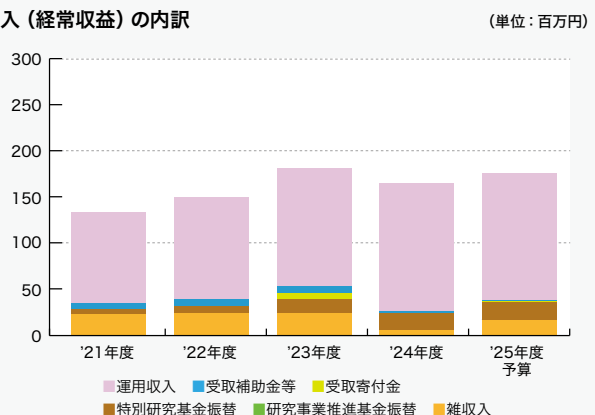
保有資産額の推移



経常収支の推移



収入（経常収益）の内訳



貸借対照表および正味財産増減計算書

貸借対照表

(単位：千円)

科 目	2021年度 期末	2022年度 期末	2023年度 期末	2024年度 期末
I. 資産の部				
1. 流動資産	40,384	49,022	81,915	110,154
2. 固定資産	4,734,342	4,729,681	5,154,660	5,168,502
1) 基本財産	3,397,830	859,892	997,756	1,120,005
2) 特定資産	131,870	2,712,546	3,053,289	2,997,429
研究事業推進基金	40,000	40,000	40,000	40,000
特別研究基金	87,310	79,310	64,310	45,310
修繕積立金	-	10,000	24,000	38,000
退職給付引当金	4,560	5,104	5,798	7,727
運用資産	-	2,578,132	2,919,181	2,866,392
3) その他固定資産	1,204,642	1,157,243	1,103,614	1,051,068
資産合計	4,774,726	4,778,703	5,236,574	5,278,657
II. 負債の部				
1. 流動負債	10,441	14,494	7,938	6,611
2. 固定負債	9,397	6,582	5,798	7,727
負債合計	19,839	21,076	13,736	14,338
III. 正味財産の部				
1. 指定正味財産	3,525,140	3,557,334	4,021,247	4,071,707
2. 一般正味財産	1,229,747	1,200,293	1,201,591	1,192,612
正味財産合計	4,754,887	4,757,627	5,222,839	5,264,319
負債及び正味財産合計	4,774,726	4,778,703	5,236,574	5,278,657

正味財産増減計算書

(単位：千円)

科 目	2021年度 決算	2022年度 決算	2023年度 決算	2024年度 決算	2025年度 予算
A. 一般正味財産増減の部					
I. 経常増減の部					
1. 経常収益	134,095	151,510	183,136	181,929	178,072
運用収入	98,043	111,070	129,324	142,549	140,454
受取補助金等	7,482	7,158	7,068	3,940	850
寄付金	-	30	6,732	4,194	1,000
特別研究基金振替	5,690	8,000	15,000	19,000	19,000
研究事業推進基金振替	-	-	-	-	-
雑収入	22,880	25,252	25,012	12,246	16,768
2. 経常費用	162,673	180,841	182,344	191,361	213,802
事業費	147,213	166,253	168,652	176,963	199,341
管理費	15,460	14,588	13,692	14,398	14,461
(うち指定正味財産への振替額)	-	-	-	-	-
3. 評価損益等	-	△122	506	453	-
当期経常増減額	△28,577	△29,454	1,298	△ 8,980	△ 35,730
II. 経常外増減の部					
当期経常外増減額	1,480	-	-	-	-
当期一般正味財産増減額	△27,097	△29,454	1,298	△ 8,980	△ 35,730
一般正味財産期首残高	1,256,844	1,229,747	1,200,293	1,201,591	1,160,379
一般正味財産期末残高	1,229,747	1,200,293	1,201,591	1,192,612	1,124,649
B. 指定正味財産増減の部					
当期指定正味財産増減額	△43,337	32,194	463,913	50,460	△ 19,000
指定正味財産期首残高	3,568,477	3,525,140	3,557,334	4,021,247	4,002,247
指定正味財産期末残高	3,525,140	3,557,334	4,021,247	4,071,707	3,983,247
C. 正味財産期末残高	4,754,887	4,757,627	5,222,839	5,264,319	5,107,896

組織

(2025年6月20日現在)

理事長

上田 輝久 株式会社島津製作所 代表取締役 会長

専務理事

和氣 弘明 株式会社島津製作所シニアエキスパート

理事

河合 智明 公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構常務理事

窪田 裕幸 京都商工会議所常務理事

関 総一郎 公益社団法人関西経済連合会専務理事

本法人の理事でありました松本紘氏は、6月15日に逝去されましたので法令により同日付で理事を退任されました。

監事

北岡 光夫 株式会社島津製作所エグゼクティブアドバイザー

高橋 一浩 公認会計士、税理士

評議員

浅見 徹 株式会社国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 代表取締役社長

大原 謙一郎 公益財団法人大原芸術財団大原美術館名誉館長

塩崎 一裕 奈良先端科学技術大学院大学学長

菅浦 隆弘 近鉄グループホールディングス株式会社取締役常務執行役員

鈴木 一弥 京都府副知事

諏訪 正樹 オムロン株式会社執行役員技術・知財本部長兼
オムロンサイニックス株式会社代表取締役社長

立本 成文 総合地球環境学研究所顧問、京都大学名誉教授

西本 尚弘 株式会社島津製作所常務執行役員

平野 俊夫 大阪大学名誉教授・第17代総長
公益財団法人大阪国際がん治療財団理事長堀場 厚 公益社団法人関西経済連合会副会長、京都商工会議所会頭
株式会社堀場製作所代表取締役会長兼グループCEO

松尾 泰樹 内閣官房政策参与

所長

本研究所の所長でありました松本紘氏は、6月15日に逝去されましたので内規の趣旨により同日付で所長を退任されました。

副所長

小寺 秀俊 京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授

チーフリサーチフェロー

有本 建男 科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授
国際学術会議 (ISC) フェロー

高見 茂 京都光華女子大学学長、京都大学名誉教授

主席研究員

鈴木 晶子 理化学研究所客員主管研究員、京都大学名誉教授

研究企画推進会議委員

榊 裕之 奈良国立大学機構理事長、トヨタ学園フェロー
豊田工業大学名誉学長、東京大学名誉教授 <議長>稲賀 繁美 国際日本文化研究センター名誉教授
総合研究大学院大学名誉教授小谷 元子 理化学研究所理事長特別補佐 (領域総括)・開拓研究所所長・
数理創造研究センター数理展開部門数学応用研究チーム
チームディレクター、東北大学理事・副学長高橋 義人 平安女学院大学国際観光学部特任教授
京都大学名誉教授

中村 道治 科学技術振興機構名誉理事長

吉川 左紀子 京都芸術大学芸術学部特別教授
京都大学フィールド科学教育研究センター特任教授
京都大学名誉教授

主任研究員

加納 圭 滋賀大学教育学系教授

駒井 章治 東京国際工科専門職大学工科学部教授

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

特任研究員

秋山 知宏 総合地球環境学研究所上廣環境日本学センター
特任准教授

金澤 洋隆 生駒市立病院医師、大阪医専専門学校非常勤講師

児玉 菜 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程

佐藤 啓明 京都大学大学院総合生存学館総合生存学専攻博士課程

山根 直子 島根大学法文学部言語文化学科・
大学院人間社会科学研究所准教授渡辺 彩加 京都大学学際融合教育研究推進センター技術補佐員
同大学東南アジア地域研究研究所連携研究員



2024年度評議員会及び理事会等開催状況

■ 評議員会

第94回 評議員会	開催：2024年6月14日（金）	第95回 評議員会	開催：2024年9月30日（月）※
第96回 評議員会	開催：2025年3月25日（火）	※決議の省略	

■ 理事会

第138回 理事会	開催：2024年5月15日（水）	第139回 理事会	開催：2024年6月14日（金）
第140回 理事会	開催：2024年9月11日（水）※	第141回 理事会	開催：2024年12月9日（月）
第142回 理事会	開催：2025年3月10日（月）	※決議の省略	

■ 役員・評議員候補者選考委員会

第21回 委員会	開催：2024年5月7日（火）	第22回 委員会	開催：2024年9月11日（水）
----------	-----------------	----------	------------------

■ 所長選考委員会

2024年度所長選考委員会	開催：2025年2月28日（金）書面開催
---------------	----------------------

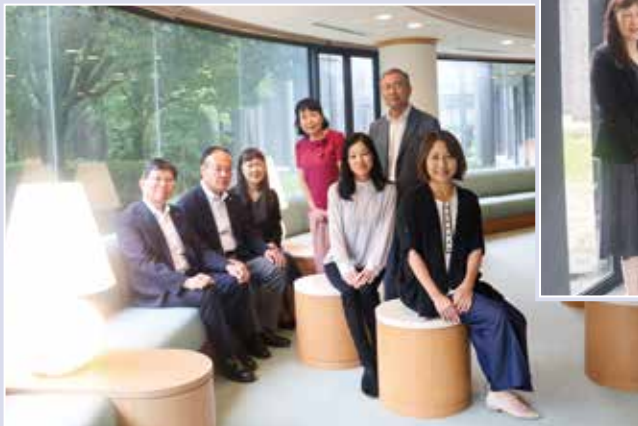
■ 資産運用委員会

第66回 委員会	開催：2024年7月24日（水）書面開催
----------	----------------------



つねに皆をおもい、学びをあたえ、
皆から愛された松本先生。
心からの感謝を胸に、ご冥福をお祈り申し上げます。

職員一同



ひらめき、癒し、 思索と交流を創発させる「智の伽藍」。

かつて都であった、飛鳥・難波・奈良・京都に囲まれた、京阪奈丘陵の地。

国際高等研究所は、古来日本文化の中心である、このけいはんな学研都市に立地しています。

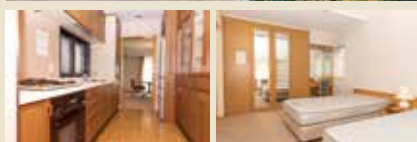
豊かな自然環境と落ち着いた建物が融合し、日本特有の風土・文化と繊細な感性を活かした静謐な研究環境は、
高等研究の場としてふさわしく、研究者たちの英知や発想を創発させます。



高等研バーチャル
トリップはこちら



施設フォト
ギャラリーは
こちら



■ 家族用住宅
(Aタイプ: 延床面積157㎡ 収容人数: 4~6名 4LDK 3棟)
(Bタイプ: 延床面積139㎡ 収容人数: 3~4名 3LDK 3棟)



■ 単身者住宅
(1ベッドルームタイプ 30㎡ 収容人数1名 8戸)



■ 茶室「雅松庵」
(数寄屋造平屋建 延床面積 61㎡)

■コミュニティホール
(延床面積289㎡ 収容人数50～100名)



レクチャーホール



■セミナールーム1
(延床面積70㎡ 収容人数30名)



■セミナールーム2
(延床面積70㎡ 収容人数30名)



■セミナーラウンジ
(延床面積160㎡ 収容人数30名)

敷地面積 40,167平方メートル
建築面積 5,252平方メートル
延床面積 6,039平方メートル

正門



■和室
(延床面積70㎡ 収容人数6～8人)



■研究個室
(延床面積 25㎡)



■レクチャーホール
(延床面積240㎡ 収容人数126名)

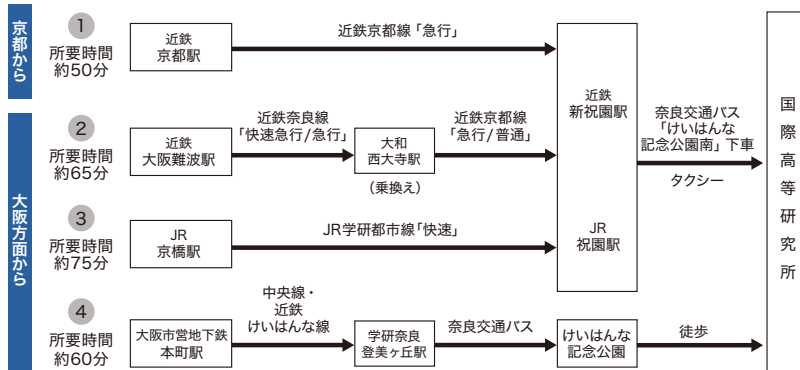
けいはんな学研都市 広域地図



周辺地図



電車・バスをご利用の方



お車をご利用の方

京奈和自動車道「精華学研IC」より約5分。
駐車場（無料）をご利用いただけます。

空港からのアクセス

- ▶ 関西国際空港 → 大阪上本町駅までリムジンバスで約50分。
- ▶ 大阪国際空港（伊丹） → 大阪上本町駅までリムジンバスで約30分
大阪上本町駅から近鉄けいはんな線「学研奈良登美ヶ丘駅」まで約45分。
学研奈良登美ヶ丘からバス・タクシーで約15分

**公益財団法人
国際高等研究所**

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005
<https://www.ias.or.jp/>

